調 査 年 報 19

平 成 18 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

KP－397出土遺物

KP－397出土の手形付土製品（左）と足形付土製品（右）

KP－397遺物出土状況（上：南西から・下：北から）

繊維製品出土状況（織り目が詰まっている部分）

繊維製品出土状況（たて糸の幅が広い部分）

舟形容器出土状況

人骨検出状況

目　　次

平成18年度の調査

1　調査の概要 ……1

2　調査遺跡 ……4

キウス５遺跡 ……4

キウス９遺跡 ……8

梅川４遺跡 ……10

梅川２遺跡 ……14

祝梅川上田遺跡 ……15

対雁２遺跡 ……18

矢不来８遺跡 ……20

矢不来10遺跡 ……22

館野遺跡 ……24

天寧１遺跡 ……26

上茶路遺跡 ……32

虎杖浜２遺跡 ……34

白滝遺跡群 ……36

前サンル１遺跡 ……46

占冠原野１遺跡 ……48

石倉１遺跡・濁川左岸遺跡 ……52

柏木川４遺跡 ……54

西島松２遺跡 ……58

板小屋沢遺跡・日の出２遺跡 ……62

3　現地研修会の記録 ……64

4　協力活動及び研修 ……65

5　平成18年度刊行予定報告書 ……68

6　組織・機構 ……69

7　職員 ……70

北海道史略年表

本州の時代区分	年代（西暦）	北海道の時代区分	平成18年度調査遺跡の主な時期
明治～平成	A.D.1900	（近代，現代）	
江戸時代		近世 アイヌ文化期	
室町時代		中世 アイヌ文化期	キウス５
鎌倉時代			梅川２、祝梅川上田
	A.D.1200		キウス９
平安時代		擦文文化期	キウス９
			柏木川４
	A.D.800		西島松２
奈良時代		オホーツク文化期	キウス５
古墳時代		続縄文時代	
	A.D.300		
弥生時代			対雁２
	B.C.400		上茶路、西島松２
縄文時代 晩期		縄文時代 晩期	対雁２、梅川４、天寧１、柏木川４
	B.C.1000		
縄文時代 後期		縄文時代 後期	柏木川４
			天寧１、矢不来８、矢不来10
	B.C.2000		天寧１、占冠原野１、矢不来８
縄文時代 中期		縄文時代 中期	キウス５、柏木川４
			西島松２、虎杖浜２
	B.C.3000		
縄文時代 前期		縄文時代 前期	
	B.C.4000		
縄文時代 早期		縄文時代 早期	矢不来10
			日の出２、キウス９
	B.C.7000		
縄文時代 草創期		縄文時代 草創期	
			旧白滝５
	B.C.12000	旧石器時代	旧白滝５
			旧白滝５、キウス５、祝梅川上田
旧石器時代	B.C.20000		旧白滝５
			旧白滝５
	B.C.30000		

平成18年度の調査

1　調査の概要

今年度は道内11市町村に所在する18遺跡で発掘調査を実施した。このうち９遺跡は前年度などからの継続調査である。継続で整理作業を行ったのは５市町の６遺跡である。

発掘調査を工事原因別に見ると、国土交通省北海道開発局の各開発建設部が実施する河川改修、あるいは国道の建設や改良に伴う調査が13遺跡、東日本高速道路株式会社の高速道路建設に伴う調査が１遺跡、北海道（土木現業所）が行う河川改修、道路改良工事に伴うものが４遺跡である。

以下、調査の成果を時代、時期順に略述する。縄文時代の遺跡では複数の時期の遺物が出土することが多いが、ここでは顕著なものを重点的に述べる。なお、遺構などの（　）数字は員数である。

旧石器時代　旧白滝５遺跡では、20万点を上まわる多量の遺物があり、それらは大規模な遺物集中範囲として平面的に分離され、いくつかの時期の重複として確認されている。石器群の中で特徴的なものは、石刃技法のもの、舟底形石器を特色とするもの、尖頭器を特色とするもの、有舌尖頭器を特色とするもの、側縁鋸歯状の小型尖頭器を特色とするものなどである。

キウス５遺跡の台地部で、細石刃石器群が検出されている。キウス９遺跡から広郷技法の彫器１点、細石刃３点が出土している。祝梅川上田遺跡では細石刃石器群が２か所認められた。

前サンル１遺跡では、珪質頁岩系の石材を使った両面加工の尖頭器破片（7）が出土している。

縄文時代　早期　日の出２遺跡は、黒曜石の石核・剥片が多量に出土しており、剥片剥離、石器製作の場所である。検出された土器は少量であるが、早期のものがある。キウス９遺跡では、黒曜石製の石刃鏃が22点出土し、前年度分と合わせると90点を上回ることになった。矢不来10遺跡では、後葉の中茶路式土器が出土している。

前期　西島松２遺跡では植苗式土器の時期の竪穴住居跡（6）が検出されている。

虎杖浜２遺跡では、後半の時期の「撹乱貝層」からではあるが、暖流系のブリ・マダイ・ヒラメ・カサゴなどの魚類骨が得られている。銛頭、骨針、装身具などの骨角器もある。

中期　キウス５遺跡の台地部の住居跡（2）、土坑（10）、焼土（45）はこの時期のものとみなされる。焼土の多くは被熱が著しく、列状に並んでいる。板小屋沢遺跡からは中期の土器が出土している。

柏木川４遺跡では竪穴住居跡（7）が検出されている。矢不来８遺跡では竪穴住居跡（1）、焼土（1）、柱穴様の小土坑（3）が検出されている。これらの遺構は中期後半～後期前葉の時期であろう。

天寧１遺跡で昨年検出した貝塚資料は、水洗選別を行った。時期は北筒式土器の頃のものであり、貝類はオオノガイが多く、アサリ、ヒメエゾボラ、ホタテ、カキなどが含まれている。土器、石器のほかに銛頭、釣針、針、刺突具などの骨角器、貝製平玉、石製玉などもある。トド、オットセイ、アザラシ、クジラ、イルカなどの海獣類、エゾシカ、イヌなどの陸獣類、鳥類、カジキマグロ、タラ、カレイ、キュウリウオなどの魚類骨が認められる。

貝塚と同じ時期の盛土遺構からは、土坑（1）、集石（16）、焼土（16）、灰集中（6）などの遺構が検出されている。さらにこの盛土中からは、屈葬人骨１体が良好な残存で出土している。人骨には、黒曜石製ナイフ、棒状骨製品、管状骨製品、砂岩礫などが伴っている。

占冠原野１遺跡では、Ｔピット（127）、土坑（1）が検出されており、ここのＴピットは底部形態の特色ごとに、それぞれ列を成している様子が認められる。キウス９遺跡では、Ｔピット（2）が検出されている。矢不来10遺跡で検出されたＴピット（1）は、溝状のもので、長さ2.7mである。

後期　矢不来８遺跡の土器は、後期前葉の時期のものが多い。矢不来10遺跡でも後期前葉の土器が出土している。

柏木川４遺跡の低地部では、中葉～後葉の河道部分から、舟形の木製品、皿状木製品、槌状木製品(7)、補修孔に紐が付着した土器片、アンギンとみられる繊維製品、漆製品などが出土している。西島松２遺跡では中葉の時期の竪穴住居跡（3）が検出されており、そのうちのひとつでは、出入り口部分が確認できた。

晩期　キウス５遺跡の低位部では円形小土坑（3）を検出している。天寧１遺跡では、樽前ｃ火山灰の上下から土器、石器が出土しており、樽前ｃ火山灰よりも下位の盛土部分からは、イノシシの臼歯を含む多くの獣骨類が検出されている。梅川４遺跡では、竪穴住居跡（1）、土坑（155）、土器集中（3）などが検出されている。

西島松２遺跡では、後葉の時期の土坑墓・土坑、焼土などを多数検出している。これらの遺構は、昨年度の調査区域から続いており、なかには遺体が痕跡的に残存しているものもある。この時期の土器、石器も多量に出土している。

柏木川４遺跡では、多数の土坑が検出されている。KP－386と呼称する土坑からは、完形土器３個体が出土している。さらに、KP－397と呼称する土坑には、土器、石器とともに、足形付土製品、手形付土製品、把手付双口土器などがみられた（口絵　参照）。

対雁２遺跡で検出された土坑（13）、焼土（217）、集石（4）などは、晩期中葉～続縄文時代前半の時期である。これらの遺構は、自然埋没したとみなされる。土坑は、円形や楕円形、規模は長径0.4～0.9ｍほどの小型のものが多い。土器は、深鉢・鉢・浅鉢・壷・ミニチュア土器などがあり、30個体が復元されている。なかでも口縁部直径が55㎝の鉢は、この時期のものとしてはかなり大型の部類になり、注目される。石器は、石鏃、スクレイパー、たたき石が多く出土している。

平成18年度の発掘調査など

事業委託者	原　因　工　事	遺　跡　名	所　在　地	調査面積（㎡）	区分、備考
札幌開発建設部	一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事	キウス５	千　歳　市	3,200	平成15年、16年
		キウス９	千　歳　市	7,956	平成17年から継続
		梅川２	千　歳　市	7,625	新規
		梅川４	千　歳　市	6,350	新規
		祝梅川上田	千　歳　市	9,100	新規
石狩川開発建設部	石狩川改修工事の内対雁築堤工事	対雁２	江　別　市	700	平成11年から継続
		対雁２	江　別　市	整理作業	
函館開発建設部	函館江差自動車道建設工事	矢不来８	北　斗　市	82	平成17年から継続
		矢不来10	北　斗　市	7,607	新規
		館野	北　斗　市	整理作業	平成16年調査
室蘭開発建設部	登別拡幅道路改良工事	虎杖浜２	白　老　町	1,770	平成13年以来
釧路開発建設部	釧路外環状道路改良工事	天寧１	釧　路　町	2,720	平成17年から継続
	上茶路道路改良工事	上茶路	白　糠　町	1,130	新規
網走開発建設部	一般国道450号白滝丸瀬布道路工事	旧白滝５	遠　軽　町	4,656	平成15年以来
		白滝８ほか	遠　軽　町	整理作業	
旭川開発建設部	天塩川サンルダム建設工事	前サンル１	下　川　町	922	新規
東日本高速道路株式会社北海道支社	北海道縦貫自動車道建設工事	湧川左岸石倉１	森　　町	整理作業	平成16年調査
	北海道横断自動車道建設工事	占冠原野１	占　冠　村	4,702	新規
石狩支庁（札幌土木現業所）	柏木川改修工事	西島松２	恵　庭　市	7,205	平成17年から継続
		柏木川４	恵　庭　市	12,600	平成16年から継続
		西島松５	恵　庭　市	整理作業	
後志支庁（小樽土木現業所）	余市赤井川線道路改良工事	板小屋沢	赤　井　川　村	600	新規
		目の出２	赤　井　川　村	2,400	新規
合		計		78,040	

続縄文時代　上茶路遺跡では、樽前ｃ火山灰よりも上位から、焼土（76）、集石（1）、剥片集中（2）が検出されている。これらは晩期終末～続縄文時代初頭のものである。定形的な石器は、石鏃が多い。

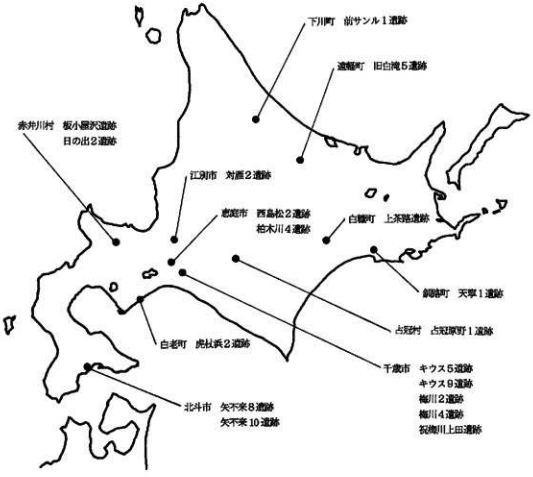
擦文文化期　キウス５遺跡の台地部には竪穴住居跡（5）、土坑（1）があり、低位部からも遺物が検出されている。西島松２遺跡の竪穴住居跡（4）は、一辺が５ｍ規模のもの（2）と、一辺が２ｍ規模のもの（2）であり、すべてカマドがあり、煙道は南辺にある。柏木川４遺跡では、２基が対をなす土坑が５か所検出された。

アイヌ文化期　祝梅川上田遺跡では住居跡（11）、灰集中（4）が検出され、鉄鍋、鉈、刀子、マレックなどの鉄製品が出土している。梅川２遺跡では住居跡（2）が検出されている。

キウス５遺跡の低位部では、近世の畑跡３面を検出している。畑跡には明瞭な畝（うね）が認められる。さらに畑耕作以前の建物跡（1）、建物に伴う柱穴群も検出されている。木製遺物には、軸（じく）か箕（み）の未成品と思われる大型の刳物（くりもの）や曲物（まげもの）蓋の完品、桶の側板、杭、建材などがあり、丸木材、切片も多い。キウス９遺跡で検出された建物跡（1）は、この時期のものであろう。

継続整理・報告書作成　石倉１遺跡、濁川左岸遺跡は16年度の発掘資料の整理作業である。白滝遺跡群、西島松５遺跡、対雁２遺跡、館野遺跡については、それぞれ膨大な資料群の整理が継続されており、白滝遺跡群、西島松５遺跡については、順次報告書が刊行されている。

対雁２遺跡の整理作業は、平成11年、12年に調査を行った「土器集中１」であり、報告書を刊行した。館野遺跡は平成15年度に調査したものは、報告書を刊行して終了した。さらに平成16年度調査分についての整理作業を開始した。



2　調査遺跡

キウス５遺跡（Ａ－03－93）

事 業 名：一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部
所 在 地：千歳市中央1287－７
調査面積：3,200㎡
発掘期間：平成18年５月８日～10月31日
調 査 員：三浦正人、菊池慈人、愛場和人、袖岡淳子、末光正卓、広田良成

遺跡の概要

遺跡は千歳市街地から北東に約８㎞、馬道（まおい）丘陵西側裾部に位置する。標高は６～40mである。平成６～10年度に高速道路建設に伴う発掘調査を当センターと千歳市教育委員会が行っており、55,885㎡が既調査である。また対岸には平成17・18年度に調査を行ったキウス９遺跡がある。

今回の調査は国道337号線の新ルート建設工事に伴うもので、丘陵端部に近い台地部とキウス川沿いの低位部が対象である。平成15年度（5,000㎡）、16年度（1,056㎡）に引き続き３年目の調査で、今年度は台地部1,920㎡、低位部1,280㎡の計3,200㎡を調査した。

台地部の基本層序は、Ⅰ層：表土層、Ⅱ層：樽前ａ降下軽石層（Ta－ａ）、Ⅲ層：第１黒色土層、Ⅳ層：樽前ｃ降下軽石層（Ta－ｃ）、Ⅴ層：第２黒色土層、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：恵庭ａ降下軽石上位のローム層、Ⅷ層：恵庭ａ降下軽石層（En－ａ）、Ⅸ層：支笏軽石流堆積物（Spfl）である。低位部でのⅤ～Ⅶ層は河川堆積物を主体とした砂礫・シルト・粘土の互層で、間層に数枚の黒色土層が入る。さらにこれを大きな流路（旧河道）や小規模の流水痕が幾重にも浸食し、そこに砂礫とシルト質粘土が堆積する。台地部ではⅢ・Ⅴ層、低位部ではⅢ層と旧河道部の砂礫層が主な遺物包含層である。

遺構と遺物

台地部：平坦部と斜面部からなるが、南側約１/３がⅨ層上面まで削平されている。遺構のほとんどは平坦面で検出されている。Ⅲ層の遺構は擦文文化期の竪穴住居跡５軒、土坑１基、土器破片集中１か所、時期不明の柱穴状ピット３基、集石１か所を確認した。Ⅴ層の遺構は竪穴住居跡２軒、土坑10基、焼土45か所、土器破片集中１か所、フレイク・チップ集中３か所を確認した。Ⅴ層の遺構の多くは出土遺物から縄文時代中期と考えられる。焼土の多くは被熱が著しく、列状に並んで検出されている。また、旧石器時代の細石刃石器群の石器集中が１か所検出されている。遺物は約39,000点が出土した。内訳は土器約32,000点、石器等約7,000点である。土器は縄文時代中期・晩期、擦文文化期のものが主体である。石器は石鏃、スクレイパー、石斧、砥石等の出土が多い。

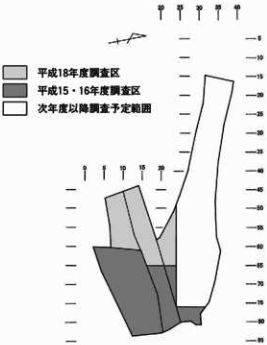
低位部：キウス川旧河道と洪水堆積で形成された低平地である。そのため、調査時には浸水対策として鋼矢板で囲い、ウェルポイントを設置した。また、現高より最深で約4m下がるため、排土用にベルトコンベアを連結して稼動した。

遺構は、平成15年度の続きとなる近世の畑跡３面を検出した。畑跡は微高の畝（うね）と溝状の畝間（うねま）からなり、畝間には耕作痕がみられた。また、畑耕作以前の建物跡１軒とそれに伴う柱穴群も検出されている。Ⅲ層下部では、縄文時代晩期の円形小土坑を３基確認した。

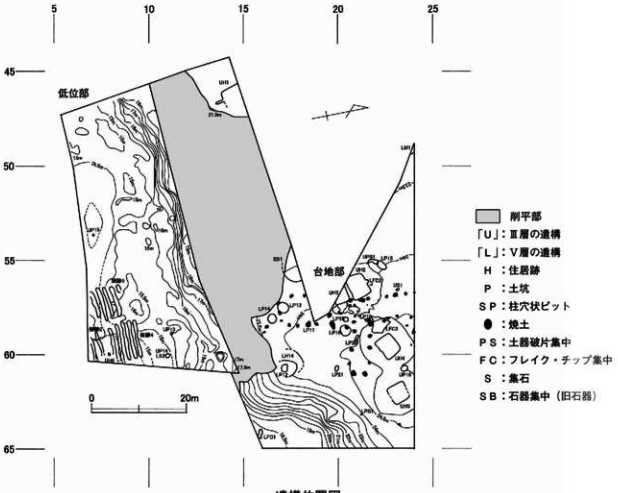
遺物は約3,800点が出土した。内訳は土器約3,000点、石器等約800点である。台地の崩落と河川堆積で形成されているため、縄文時代～擦文文化期の各時期の土器と石器が混在して出土している。石器の中には旧石器も少数ある。木製品は約100点出土している。ほとんどがアイヌ文化期の丸木材や切片だが、軸（つば）か筴（ふち）の未成品と思われる大型の刳物（くりもの）や曲物蓋（まげものふた）の完品、桶の側板や杭・建材なども出土している。また、点数は少ないが縄文時代と考えられる木製品もある。

国土地理院発行の5万分の1地形図「恵庭」を使用

遺跡位置図



調査範囲図

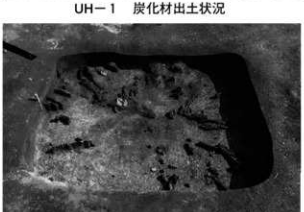


遺構位置図

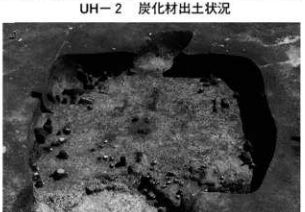
調査状況

UH－1　炭化材出土状況

UH－2　炭化材出土状況

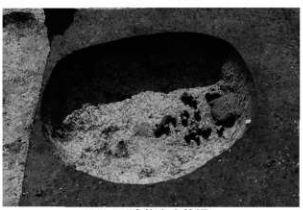


UH－4　遺物出土状況



UH－5　遺物出土状況

LP－13・14完掘



LP－16遺物出土状況

焼土列

旧河道の調査

木製品出土状況

畑跡

キウス９遺跡（Ａ－03－279）

事 業 名：一般国道337号千歳市新千歳関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：千歳市中央417・972

調査面積：7,956㎡

発掘期間：平成18年５月８日～10月31日

調 査 員：三浦正人、菊池慈人、愛場和人、袖岡淳子、末光正卓、広田良成

遺跡の概要

キウス９遺跡は千歳市街から北東へ約８kmの馬追（まおい）丘陵西側裾野、キウス川左岸に位置する。調査区は標高約18～27mのやや舌状となる段丘上にひろがり、北側はキウス川に向って急斜面、西側は緩斜面地形となっている。キウス川対岸にはキウス５遺跡がある。現況は林地等で、木根や風倒木痕が多数みられる。基本土層は下図の通りで、Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層から主に遺物が出土した。

調査は平成17年度（17,044㎡）に続き２年目で、17年度は台地縁辺でアイヌ文化期の平地住居跡、建物跡、擦文文化期前期の竪穴住居跡、鍛冶遺構などが検出された。また遺物は擦文土器が約26,000点出土したほか、縄文時代早期、晩期の遺物が多くみられた。特徴的な遺物としては石刃鏃が破片も含め70点ほど出土している。

今年度は昨年度調査区の南東側、台地平坦部および緩斜面部分を調査した。調査区南側１/５程はⅦ層まで削平されていた。

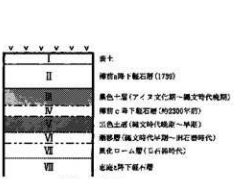
遺構と遺物

遺構はⅢ層から建物跡１棟、土坑１基、焼土１か所、掘り揚げ土１か所、Ⅴ層から土坑１基、Ｔピット２基、焼土１か所が検出された。昨年度調査の台地縁部分に比べ遺構は希薄である。

遺物は約１万点出土した。昨年度調査のＵＨ－１南側で擦文土器がまとまって出土したほか、縄文時代晩期後葉、後期後葉の土器が比較的多く出土した。また石刃鏃が包含層から22点出土し、昨年度と合わせて出土数は90点を超えた。土器や他の石器群は明確に伴わない。Ⅶ層からは広郷（かんさと）技法の彫器１点と石刃１点、削片１点、細石刃３点が５ｍ程の範囲で出土している。

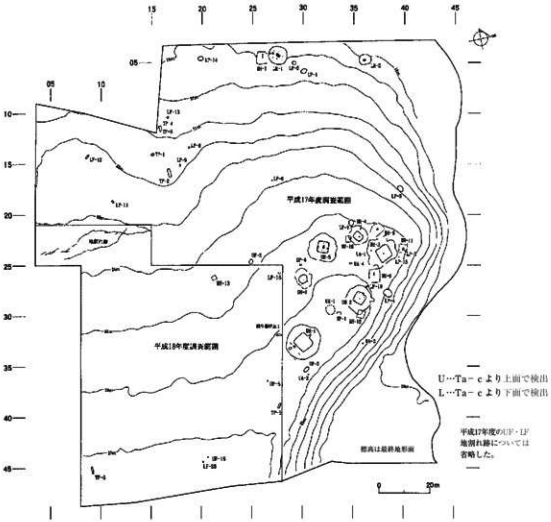
２か年合計の遺構数はⅢ層の遺構が竪穴住居跡６軒、平地住居跡３軒、建物跡４棟、鍛冶遺構１か所、土坑５基、集石３か所、灰集中４か所、焼土16か所、柱穴36基。Ⅴ層は竪穴住居跡２軒、土坑16基、Ｔピット６基、焼土28か所、フレイク集中１か所である。

また昨年に引き続きTa－ｃ降灰期からＢ－Tm降灰期間の地震による地割れ跡が確認されている。



基本土層図

年度別調査範囲図


平成17年度調査範囲
平成18年度調査範囲
U…Ta－c より上面で検出
L…Ta－c より下面で検出
平成17年度のUF・LF
地割れ跡については
省略した。
標高は最終地形面
20m

遺構位置図

調査状況

梅川４遺跡（Ａ－03－59）

事　業　名：一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委　託　者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部
所　在　地：千歳市祝梅2047－55
調査面積：6,350㎡
発掘期間：平成18年５月８日～10月31日
調　査　員：鈴木　信、宗像公司

遺跡の概要

梅川４遺跡は、ＪＲ千歳駅の東約３km、梅川左岸と祝梅川源流部右岸の間の台地上に所在する。今年度は、標高約15mの平坦な台地から北西向きの緩やかな斜面にかけての区域で調査を実施した。基本土層は下図のとおりで、Ⅲ層及びⅤ層が遺物包含層である。なお、過去に行われた耕作により、遺物包含層が撹乱を受けている部分もあった。

遺構と遺物

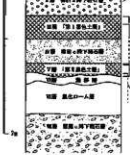
Ⅲ層の遺構は、竪穴住居跡１軒（縄文時代晩期後葉）、土坑155基（縄文時代晩期後葉）、集石２か所（擦文文化期以後）、土器集中３か所（縄文時代晩期後葉）である。竪穴住居跡は、一部が調査区域外に及ぶ。土坑は、台地の縁から斜面にかけての範囲で検出された。形状は、長径0.8～1.8mの円形や楕円形で、坑底はⅥ～Ⅶ層中に達する。遺物を伴わないものが多かったが、坑底から大型の土器片が出土した例が１基（Ｐ－159）、覆土の中位から同一個体の土器片がまとまって出土した例が３基（Ｐ－62など）でみられた。集石は、長径５～10cmの扁平または棒状礫が、長径約0.6mの範囲にまとまっていたもので、Ⅲ層上部で検出された。

Ⅴ層の遺構は土坑３基、Ｔピット１基である。土坑は、１基で縄文時代晩期後葉の土器が出土したが、他は遺物を伴わないため詳細な時期は不明である。Ｔピットは斜面部分で検出され、底面に杭跡がみられた。

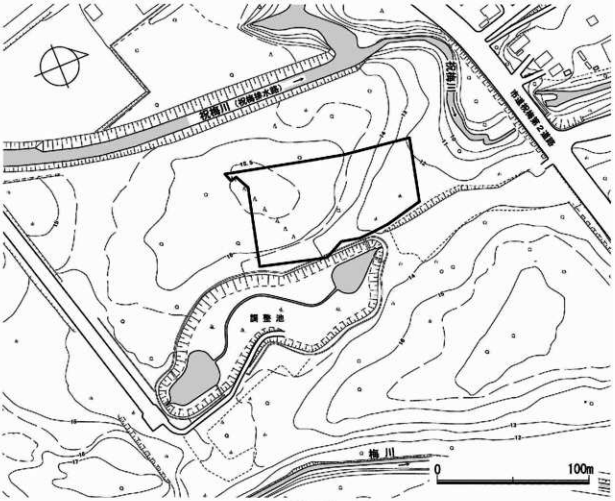
遺物は総点数約21,600点が出土した。分布は調査区の西側に偏る傾向がみられることから、祝梅川方面に向かって遺跡が続くことが推測される。土器は約18,200点で、このうち約８割がⅢ層の遺構及び包含層から出土した縄文時代晩期後葉に属するものである。Ⅴ層からは縄文時代早期～晩期にかけての土器が散点的に出土した。石器等は約3,400点で、このうち約７割がⅢ層の遺構及び包含層からの出土である。また、Ⅴ層からは旧石器時代の掻器１点が出土した。なお、Ⅲ層上面（樽前ａ降下軽石直下）からは鉄製品１点が出土した。

国土地理院発行の２万５千分の１地形図「千歳」「長都」を使用

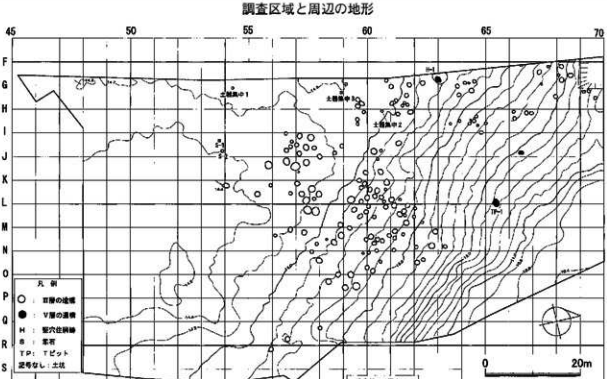
遺跡位置図



基本土層模式図



調査区域と周辺の地形



遺構位置図

Ⅲ層調査状況

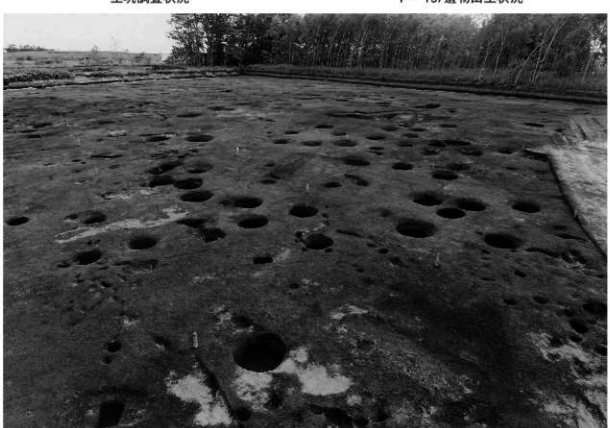
Ⅴ層調査状況

P－62遺物出土状況

H－1完掘

土坑調査状況

P－157遺物出土状況



土坑完掘

梅川２遺跡（Ａ－03－57）

事 業 名：一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部
所 在 地：千歳市祝梅487－９、487－14、491－５
調査面積：7,625㎡
発掘期間：平成18年５月８日～10月31日
調 査 員：皆川洋一、山田和史

遺跡の概要

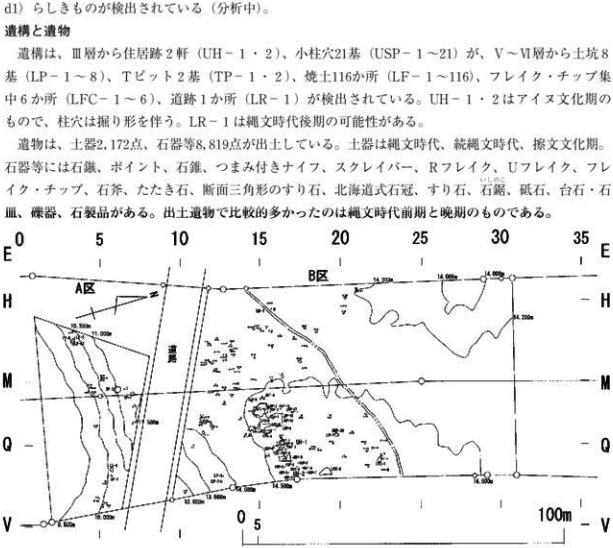
梅川２遺跡は、千歳市の市街地から東へ2.5kmほど行った、祝梅川を経て千歳川に流入する梅川右岸に位置している。調査区は道路をはさんだ南側緩斜面（標高11～12m）のＡ区と北側の低位段丘上平坦部（標高15m程）のＢ区とに分かれた２か所である。同時に調査した祝梅川上田遺跡とは100m程離れて隣接する。今回は遺構確認を中心とした発掘調査を実施した。当センターにおいて梅川周辺の調査報告は今年度が初となる。

遺跡の基本土層はⅠ～Ⅶ層に分けられ、主な包含層はⅢ層（アイヌ文化期、擦文文化期、続縄文時代、縄文時代晩期）とⅤ～Ⅶ層（縄文時代早期～晩期）である。火山灰は樽前ａ降下軽石（「Ta－ａ」：Ⅱ層）、樽前ｃ降下軽石（「Ta－ｃ」：Ⅳ層）が確認されている。また、Ⅵ層中には樽前ｄ1降下軽石（Ta－d1）らしきものが検出されている（分析中）。

遺構と遺物

遺構は、Ⅲ層から住居跡２軒（UH－１・２）、小柱穴21基（USP－１～21）が、Ⅴ～Ⅵ層から土坑８基（LP－１～８）、Ｔピット２基（TP－１・２）、焼土116か所（LF－１～116）、フレイク・チップ集中６か所（LFC－１～６）、道跡１か所（LR－１）が検出されている。UH－１・２はアイヌ文化期のもので、柱穴は掘り形を伴う。LR－１は縄文時代後期の可能性がある。

遺物は、土器2,172点、石器等8,819点が出土している。土器は縄文時代、続縄文時代、擦文文化期。石器等には石鏃、ポイント、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Ｒフレイク、Ｕフレイク、フレイク・チップ、石斧、たたき石、断面三角形のすり石、北海道式石冠、すり石、石錘、砥石、台石・石皿、礫器、石製品がある。出土遺物で比較的多かったのは縄文時代前期と晩期のものである。



Ⅴ層上面の地形と遺構位置図

祝梅川上田遺跡（Ａ－03－50）

事　業　名：一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委　託　者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部
所　在　地：千歳市祝梅617－３、619－９
調査面積：9,100㎡
発掘期間：平成18年５月８日～10月31日
調　査　員：皆川洋一、山田和史

遺跡の概要

祝梅川上田遺跡は千歳市の市街地から東へ2.5kmほど行った、祝梅川を経て千歳川に流入する梅川右岸の平坦な低位段丘上（標高15～16m）に立地し、同時に調査した梅川２遺跡は100m程離れて位置している。今回は遺構確認を中心とした発掘調査を実施した。当センターにおいて梅川周辺の調査報告は今年度が初となる。なお、千歳市教育委員会による発掘調査が既に周辺で数次に渡って実施されており、縄文時代からアイヌ文化期の遺構・遺物が検出されている。

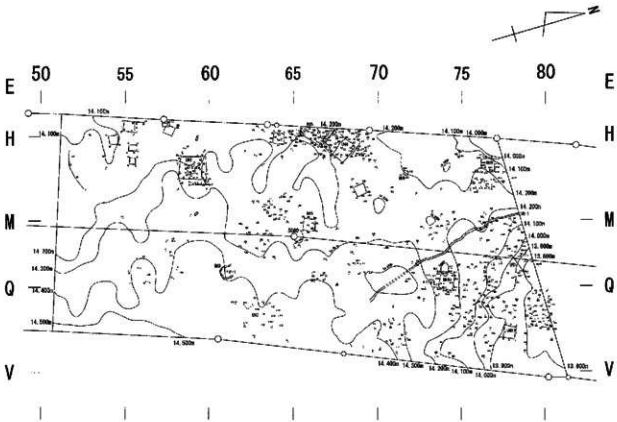
遺跡の基本土層はⅠ～Ⅶ層に分けられ、主な包含層はⅢ層（アイヌ文化期、擦文文化期、続縄文時代、縄文時代晩期）とⅤ～Ⅶ層（縄文時代早期～晩期、旧石器時代）である。調査区内の現況は耕地で、調査面積の約６割のⅠ～Ⅳ層に耕作が及んでいた。火山灰は樽前ａ降下軽石（「Ta－ａ」：Ⅱ層）、樽前ｃ降下軽石（「Ta－ｃ」：Ⅳ層）が確認されている。また、Ⅵ層中には樽前d1降下軽石（Ta－d1）らしきものが検出されている（分析中）。

遺構と遺物

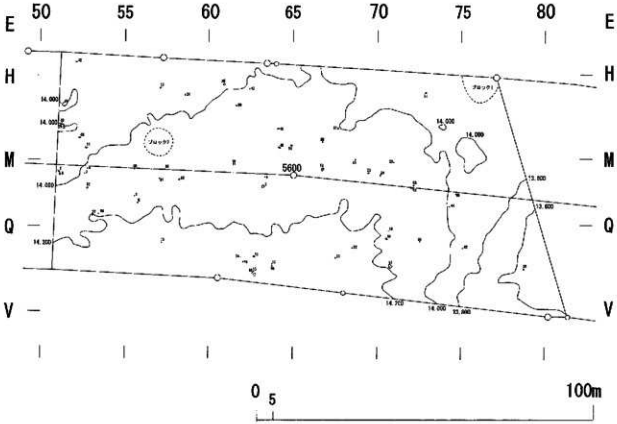
遺構は、Ⅲ層から住居跡11軒（UH－１～11）、土坑３基（UP－１～３）、集石４か所（US－１～４）、灰集中４か所（UA－１～４）、焼土14か所（UF－１～14）、小柱穴525基（USP－１～525）、道跡１か所（UR－１）が、Ⅴ～Ⅶ層から土坑２基（LP－１・２）、焼土62か所（LF－１～62）、旧石器の石器ブロック２か所が検出されている。Ⅲ層の遺構はほぼ調査区の全域で検出されている。大半はアイヌ文化期のもので、住居跡以外に小柱穴（USP）も多いことから、これらが住居ないし他の構築物の跡である可能性が高く、灰集中は所謂「灰送り」がなされた痕跡と考えられる。焼土と灰集中からは魚骨や動物遺体も検出されている。これらは恐らくこの時期の集落を構成すると考えられる。

遺物は、土器2,635点、石器等2,517点（縄文以降）、鉄製品類27点、旧石器類6,400点が出土している。土器は縄文時代早期～晩期、続縄文時代、擦文文化期のもの。石器等は石鏃、ポイント、石錐、つまみ付きナイフ、篦状石器、スクレイパー、異形石器、Ｒフレイク、Ｕフレイク、フレイク・チップ、石核、擦切石斧、石斧、たたき石、断面三角形のすり石、すり石、石鋸、砥石、台石・石皿、棒状礫、礫器、礫などがある。出土遺物で比較的多かったのは縄文時代早期・中期と擦文文化期のものである。また、縄文時代中期と考えられる玉が２点出土している。金属製品類は鉄鍋、鉈、刀子、マレック、古銭（永楽通宝）などで、ほとんどがアイヌ文化期のものである。

旧石器時代の遺物は、ブロック１、２ともに細石刃石器群が主体をなすが、ブロックごとに石器群の内容が異なる。ブロック１では細石刃、細石刃核削片、掻器、彫器、石刃などが出土しており、細石刃核削片には両面調整母型から剥離されたものと、片面調整母型から剥離されたものの２種類の形態がみられる。ブロック２では細石刃、細石刃核削片、両面調整石器、掻器、彫器、石刃、削器、掻器の刃部再生剥片、彫器削片、磨製石斧の調整剥片などが出土している。細石刃と細石刃核削片の形態は、ブロック１が「湧別技法」と「峠下技法」、ブロック２が「忍路子技法」による細石刃生産技術の特徴に類似する。恵庭ａ降下軽石（「En－ａ」：Ⅷ層）より上位のⅤ～Ⅶ層で出土していることから、後期旧石器時代後半期に位置付けられる。



Ⅳ層上面の地形とⅢ層の遺構位置図



Ⅴ層上面の地形とⅤ～Ⅶ層の遺構位置図

ＵＨ－11完掘

ブロック２の両面調整石器と剥片出土状況（Ⅵ層）

対雁２遺跡（Ａ－02－110）

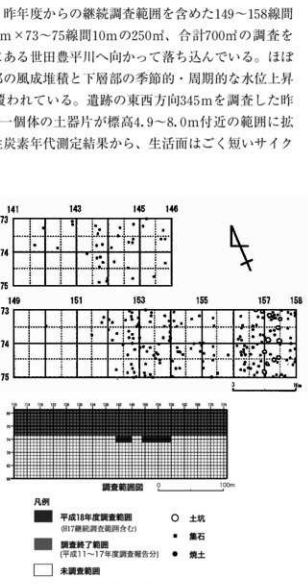
事　業　名：石狩川改修工事の内対雁築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委　託　者：国土交通省北海道開発局石狩川開発建設部
所　在　地：江別市工栄町28番地地先（石狩川河川敷緑地内）
調査面積：700㎡（継続調査範囲400㎡含む）
発掘期間：平成18年５月８日～６月30日
調　査　員：笠原　興、芝田直人、酒井秀治

遺跡の概要

対雁２遺跡はＪＲ江別駅の北西約４㎞の石狩川左岸に位置する。世田豊平川（旧豊平川）との合流地点よりも上流側の石狩川河川敷緑地内であり、標高約６～8mの自然堤防上の微高地に立地する。調査以前に運動公園の造成に伴う均平化を受けている。石狩川の河川改修が本格化する1970年代以前は対雁番屋、樺太アイヌ強制移住地、対雁小学校、榎本牧場などが所在した旧対雁村の中心部がこの付近にあり、江別の歴史を語る上で欠かせない重要な地域である。

遺跡調査の８年目にあたる。これまでの調査から、縄文時代晩期中葉～続縄文時代後半の遺跡で、特に縄文時代晩期後葉が主体と考えられる。今年度は、昨年度からの継続調査範囲を含めた149～158線間45m×73～75線間10mの450㎡および141～146線間25m×73～75線間10mの250㎡、合計700㎡の調査を行った。遺跡の地層は自然堤防の形成に伴い、西側にある世田豊平川へ向かって落ち込んでいる。ほぼ同一時期の遺構・遺物が検出される生活面は、上層部の風成堆積と下層部の季節的・周期的な水位上昇と考えられる水成堆積により数cm～十数cmの土砂で覆われている。遺跡の東西方向345mを調査した昨年度は、305面の生活面を認定している。今年度は同一個体の土器片が標高4.9～8.0m付近の範囲に拡がって出土していることが確認された。遺物や放射性炭素年代測定結果から、生活面はごく短いサイクルで形成されたと考えられる。

遺跡位置図



平成18年度調査範囲・遺構位置図

遺構と遺物

継続調査範囲を含む今年度の発掘調査範囲では、土坑13基、焼土217か所、集石４か所のほかフレイク・チップや炭化物が検出される範囲がある。土坑の形状は円形や楕円形、規模は長径0.4～0.9mほどの小型のものが多い。ほぼすべてが自然埋没したと考えられ、墓坑と見られるものは検出されなかった。焼土には、燃料と見られる炭化材やクルミなどの炭化物・焼魚骨や焼獣骨などの微細骨片を伴うもの、土器を据えるためと考えられる直径0.1mほどの浅い小ピットが１～21基検出されるものがある。また、焼土や炭化物が廃棄されたものも検出されている。

出土した遺物は、土器等11,586点、石器等17,892点、合計29,478点である。時期は縄文時代晩期中葉～続縄文時代前半に属するものである。土器は、深鉢・鉢・浅鉢・壷・ミニチュア土器が出土し、30個体が復元されている。なかでも縄文時代晩期中葉の口縁部直径が55cmの大型鉢は、この時期としてはかなり大型のもので注目される。石器は、石鏃・スクレイパー・たたき石が多く、石材は剥片石器が黒曜石、礫石器では安山岩・砂岩・珪岩が多い。

調査状況

焼土検出状況

土坑完掘

焼土断面

矢不来（やふらい）8遺跡（B－06－74）

事 業 名：高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部
所 在 地：北斗市（旧上磯郡上磯町）矢不来437－3ほか
調査面積：82㎡
発掘期間：平成18年10月3日～10月27日
調 査 員：佐川俊一、中山昭大、山中文雄

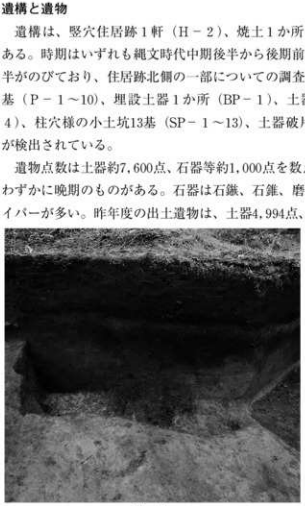
遺跡の概要

矢不来8遺跡は、茂辺地川の河口から北北西へ約1.4km、海成段丘上の標高60m付近に位置する。平成17年度には6,196㎡が調査されており、調査区の南側では縄文時代中期後半から後期前葉、北東側では晩期中葉の遺構・遺物が検出されている。今回行われた調査は、高規格道路工事に伴う高圧線の電柱移設により発掘可能となった部分である。前回に引き続いて縄文時代中期後半から後期前葉の遺構・遺物が検出されている。土層は、Ⅰ層：黒褐色の表土および耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：白頭山－苫小牧テフラの混じる暗褐色土、Ⅳ層：黒褐色土、Ⅴ層：漸移層、Ⅵ層：褐色土である。

遺構と遺物

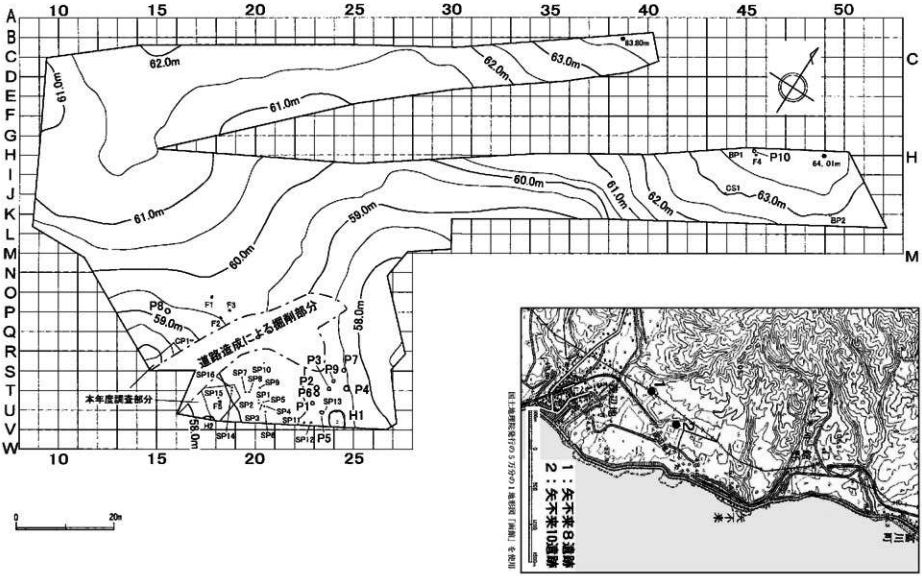
遺構は、竪穴住居跡1軒（H－2）、焼土1か所（F－5）、柱穴様の小土坑3基（SP－14～16）である。時期はいずれも縄文時代中期後半から後期前葉のものと推測される。H－2は調査区外にその大半がのびており、住居跡北側の一部についての調査である。昨年度は竪穴住居跡1軒（H－1）、土坑10基（P－1～10）、埋設土器1か所（BP－1）、土器埋設炉1か所（BP－2）、焼土4か所（F－1～4）、柱穴様の小土坑13基（SP－1～13）、土器破片集中1か所（CP－1）、礫集中1か所（CS－1）が検出されている。

遺物点数は土器約7,600点、石器等約1,000点を数える。土器は縄文時代後期前葉のものがほとんどで、わずかに晩期のものがある。石器は石鏃、石錐、磨製石斧、たたき石、すり石などがあり、特にスクレイパーが多い。昨年度の出土遺物は、土器4,994点、石器等638点である。



H－2

調査終了


1：矢不来8遺跡
2：矢不来10遺跡
国土地理院発行の「ながの」を利用
矢不来
三川川
10
15
20
25
30
35
40
45
50
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
62.0m
61.0m
63.0m
63.80m
60.0m
59.0m
58.0m
64.01m
P10
BP1
F4
CS1
BP2
P8
F1
F3
F2
CP1
道路造成による掘削部分
P3
P9
P7
P2
P6
P4
P1
SP13
H1
SP16
SP7
SP10
SP9
SP15
SP5
SP1
SP2
SP4
SP3
SP11
F5
H2
SP14
SP6
SP12
P5
本年度調査部分
0
20m

遺跡位置図・遺構位置図

矢不来(やふらい)10遺跡（Ｂ－06－76）

事 業 名：高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部
所 在 地：北斗市（旧上磯郡上磯町）矢不来234ほか
調査面積：7,607㎡（発掘調査部分6,326㎡、遺構確認調査部分1,281㎡）
発掘期間：平成18年７月10日～10月27日
調 査 員：佐川俊一、中山昭大、山中文雄

遺跡の概要

矢不来10遺跡は、茂辺地川の河口から北へ約1.5km、海成段丘上の標高約65m付近に位置する。土層は、Ⅰ層：黒色土、Ⅱ層：白頭山－苫小牧テフラの混じる暗褐色土、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：漸移層、Ⅴ層：褐色土である。主に縄文時代早期後半と後期前葉の遺物が得られている。

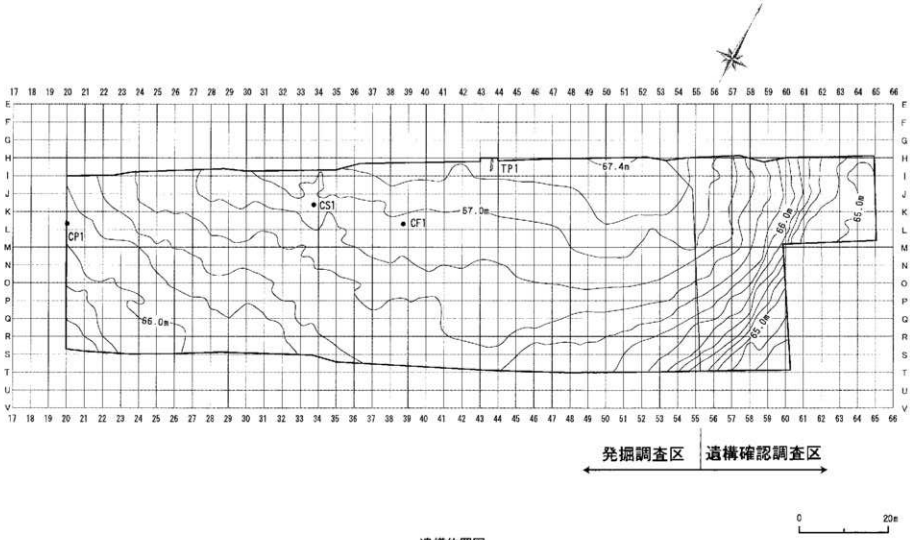
遺構と遺物

遺構はＴピット１基（TP－１）が検出されている。標高約67mの、調査区内では比較的高い部分にある。形態は長径約2.7mの溝状で、底面に杭痕などはみられない。この他、遺物の集中地点として、土器破片集中（CP－１）、フレイク・チップ集中（CF－１）、礫集中（CS－１）がある。CP－１は縄文時代後期のものである。CF－１は頁岩のフレイク・チップ約200点のまとまりで、総重量は約200ｇ、縄文時代早期後半の可能性がある。CS－１は小礫約600点のまとまりで、総重量は約1,400ｇ、時期は不明である。

遺物点数は土器約1,000点、石器等約1,600点を数える。土器は縄文時代早期後半と後期前葉のものが比較的多い。石器は石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、石篦(しゃくべら)、スクレイパー、磨製石斧、たたき石、すり石、扁平打製石器、台石、石皿などがある。上述のCF－１からは、フレイク・チップに混じって石篦が出土している。この他、箱館戦争時のものとみられる鉛製の銃弾７点がある。

TP－１

調査終了


TP1
57.4m
CS1
CF1
57.0m
CP1
56.0m
58.0m
65.0m
65.0m
発掘調査区
遺構確認調査区
0
20m

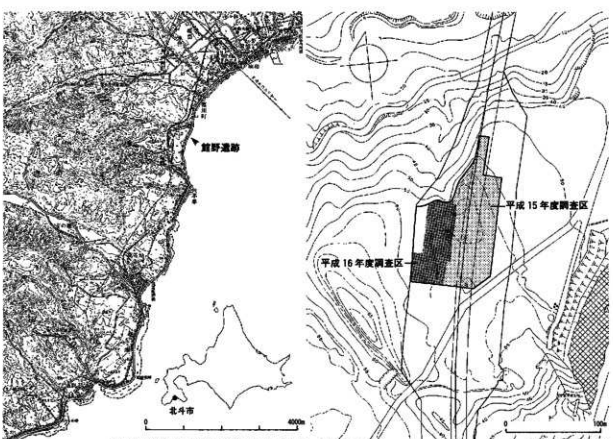
遺構位置図

館野遺跡（Ｂ－06－15）

事 業 名：高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部
所 在 地：北斗市（旧上磯郡上磯町）館野３－３ほか
調査面積：8,565㎡（平成15年度5,750㎡、16年度2,815㎡）
整理期間：平成18年４月３日～平成19年３月30日
調 査 員：佐川俊一、中山昭大、冨永勝也、山中文雄

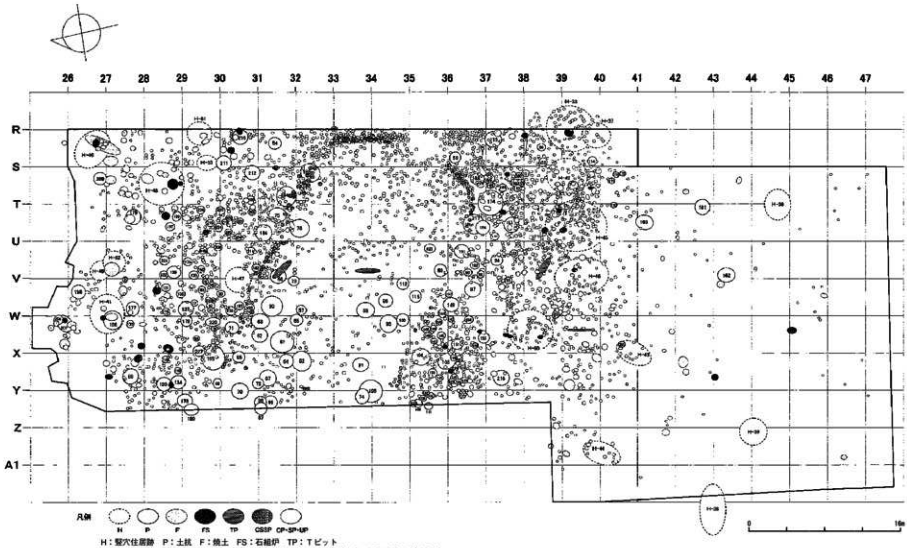
整理の概要

今年度は平成16年に検出された遺構と、北側盛土の遺物を対象に整理作業を行っている。遺構は縄文時代中期末から後期にかけてのもので、総数は15年度分を合わせると竪穴住居跡58軒（その内、16年度検出は14軒）、土坑228基（内179基）、石組炉47か所（内37か所）、焼土263か所（内207か所）、Ｔピット11基（内４基）、小ピット約3,010基（内2,880基）である。他に後期初頭の配石と、その北側と南側に配される盛土遺構があり、盛土から多くの遺物が出土している。16年度に出土した遺物は概数で約60万点、現在はこれら土器・石器等の分類と注記作業を進めている。配石盛土遺構に伴い出土する土器型式は、後期初頭の涌元１式から涌元２式、トリサキ式にかけてのもので、竪穴住居跡の多くは盛土遺構の下位から検出され、盛土構築以前のものである。土坑は南北の配石遺構を挟んで貼土部分に多く分布する。石組炉（屋外炉）と焼土は配石の外側の区域に多く検出される。このほか小ピットは広場内には約460基、配石の下位に約420基、配石外側に約2,000基が検出されている。今回は上記の遺構の位置模式図を示す。今後、各遺構の詳細について検討していきたい。



国土地理院発行の５万分の１地形図「函館」を使用

遺跡位置図　　調査範囲図


26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47
R S T U V W X Y Z A1
凡例
H P F FS TP CSSP CP・SP・UP
H：竪穴住居跡 P：土抗 F：焼土 FS：石組炉 TP：Tピット
CSSP：配石抜け跡小ピット CP：中央広場内小ピット SP：小ピット UP：配石下小ピット
0 10m

遺構位置模式図

天寧（てんねい）1遺跡（B－02－28）

事 業 名：一般国道44号釧路町釧路外環状道路工事に伴う埋蔵文化財調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部

所 在 地：釧路郡釧路町字別保原野南22線47－4ほか

調査面積：2,720㎡

発掘期間：平成18年5月16日～10月27日

調 査 員：工藤研治、越田雅司、影浦　覚、立田　理、福井淳一

遺跡の概要

天寧1遺跡は、ＪＲ釧路駅から東北東へ約4.5km離れた別保（べつほ）原野に位置する。今回の調査区は、標高2～5mの段丘裾部に立地しており、現況はヨシとハンノキを主とする低層湿原である。調査区域は、Ａ1地区・Ａ2地区の2か所に分かれており、昨年度はA2地区の一部（618㎡）を調査した。

昨年度の調査では、貝塚1か所、竪穴住居跡1軒、土坑6基、集石28か所、フレイク集中3か所、焼土56か所が確認された。遺構の時期は全て縄文時代中期後半～後期前葉である。貝塚資料を除いて約94,000点の遺物が出土した。

今年度は、Ａ1地区（1,500㎡）とＡ2地区の残り（1,220㎡）を調査するとともに、昨年度検出された貝塚資料の水洗選別を行なった。

土層は、Ⅰ：表土層、Ⅱ：黒褐色土層、Ⅲ：火山灰層（Ta－ａ、Ko－c_2、Ta－ｂ）、Ⅳａ：黒色土層、Ⅳｂ：火山灰層（Ta－ｃ）、Ⅴ：砂層、Ⅵ：黒色土層、Ⅶ：砂層、Ⅷａ：褐色土層、Ⅷｂ：黒色土層、Ⅸ：砂層、Ⅹ：黒色土層、Ⅺ：砂層、Ⅻ：黒色土層、XIII：灰色砂層、XIV：褐色砂層である。このうちⅣａ・Ⅳｃ・Ⅵ・Ⅷａ・Ⅷｂ・Ⅻ層から遺物が出土している。

遺構と遺物

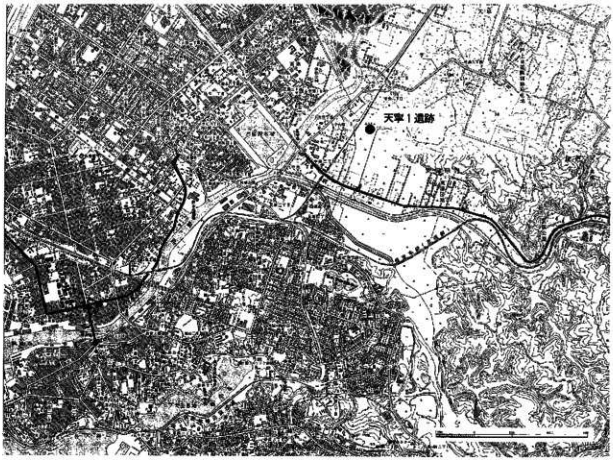
Ａ1地区の調査では、樽前ｃ火山灰の上下から縄文時代晩期前半の土器、石器が出土し、この時期の土坑が1基検出された。

Ａ2地区の調査では、段丘側に盛土遺構の広がりが確認された。盛土は腐植土・砂・小礫が混ざり合い互層をなしたもので、微細骨片や炭、焼土粒などを多量に含んでいる。土層断面には径1cm未満の砂礫が顕著に観察され、全体的に堅い。盛土は、その諸特徴から昨年度のⅤ層に相当すると考えられ、昨年度の調査区域にも盛土遺構が広がっていた可能性が高い。

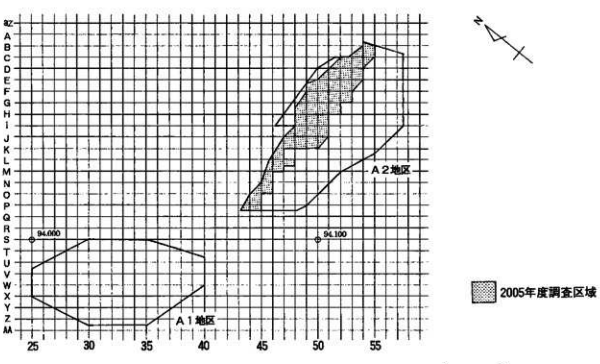
盛土遺構は、主に縄文時代中期後半～後期前葉の北筒式の時期に形成されたものであったが、上部では縄文時代晩期前半に形成されたものも一部認められた。北筒式の時期の盛土からは、土坑1基、集石16か所、焼土16か所、灰集中6か所が検出された。さらに、黒曜石製ナイフ、棒状骨製品、管状骨製品、砂岩礫などの副葬品を伴った屈葬人骨も1体確認された。このほか、盛土内からは北筒式土器や黒曜石製の剥片石器、海獣骨や鳥骨が多数出土した。縄文時代晩期前半の盛土からは、イノシシの臼歯をはじめ鹿などの陸獣骨が主に出土している。

今年度の出土遺物は、土器が約55,000点、石器等が約19,000点、計74,000点を数える。土器の9割は縄文時代晩期の小片である。定形的な石器では石鏃や石槍が多い。

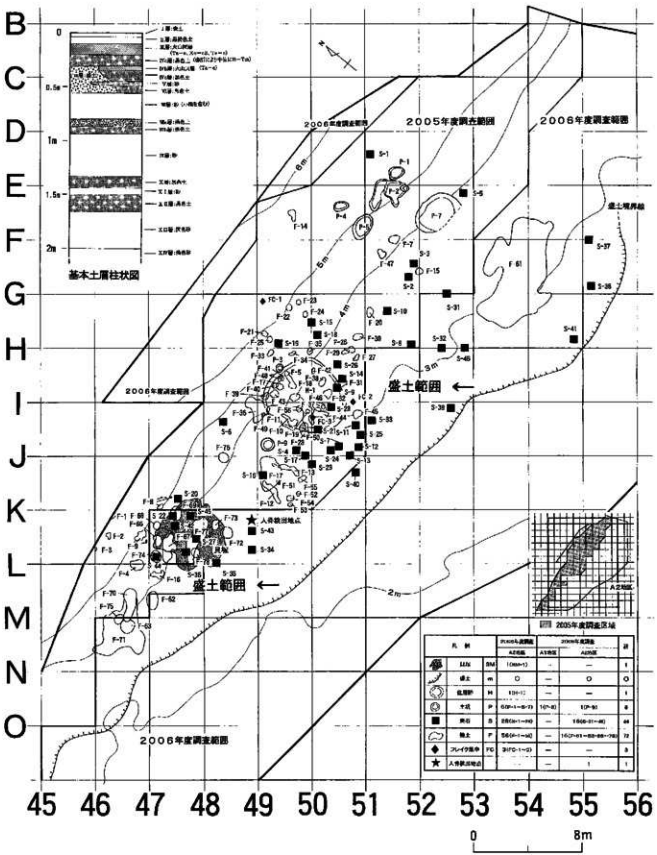
貝塚の水洗選別では、土器、石器のほかに、銛頭、釣針、針、刺突具などの骨角器、貝製平玉、石製玉が検出されている。貝塚を構成する貝類は、オオノガイが主体で、アサリ、ヒメエゾボラ、ホタテ、カキなど少量が含まれている。動物骨も多数含まれており、トド、オットセイ、アシカ、アザラシ、クジラ、イルカといった海獣類、エゾシカ、イヌ、キツネなどの陸獣類、アビ、ツルなどの鳥類、カジキマグロ、サケ、タラ、カレイ、キュウリウオ、ニシン、ウグイなどの魚類が得られている。



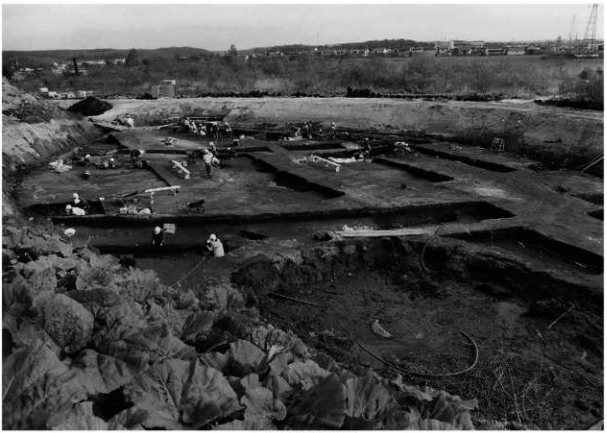
遺跡位置図　国土地理院発行の地形図２万５千分の１「鯛路」「遠矢」を使用



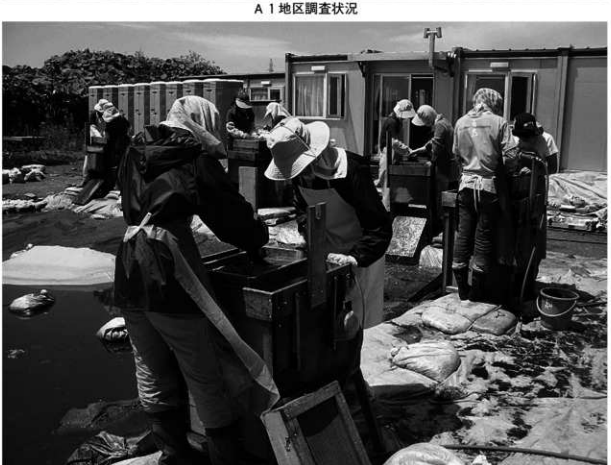
調査範囲図


基本土層柱状図
2005年度調査範囲
2006年度調査範囲
盛土範囲
人骨検出地点
2005年度調査区域
0
8m

A 2 地区遺構位置図

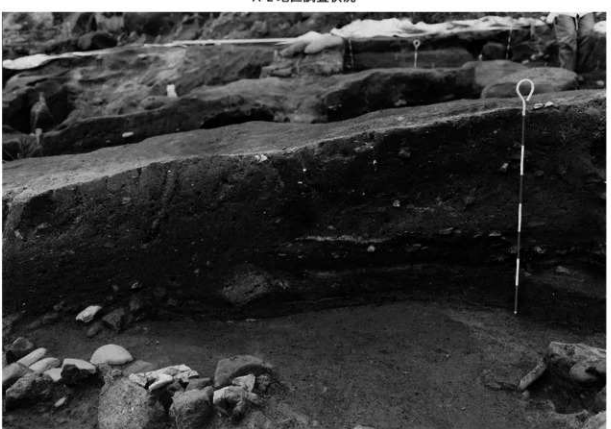


A 1 地区調査状況



貝塚資料水洗作業

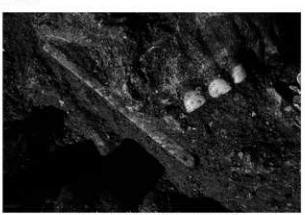
A 2地区調査状況



盛土堆積状況

盛土調査状況

人骨検出状況



棒状骨製品検出状況（右側頭部）

管状骨製品検出状況（左足）

上茶路遺跡（Ｂ－09－29）

事 業 名：一般国道392号白糠町上茶路道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部
所 在 地：北海道白糠郡白糠町上茶路基線87－１外
調査面積：1,130㎡
発掘期間：平成18年５月12日～８月22日
調 査 員：越田雅司、立田　理

遺跡の概要

遺跡は白糠市街地から本別方向に30kmほど内陸に入った沖積低地上、標高106m前後の茶路川の河川敷に位置している。遺物包含層は２m近い河川堆積物に覆われており、地表に遺物の散布は認められないが、昭和53年に行なわれたサイロ建設工事の際、土器が出土したのを契機として確認された。

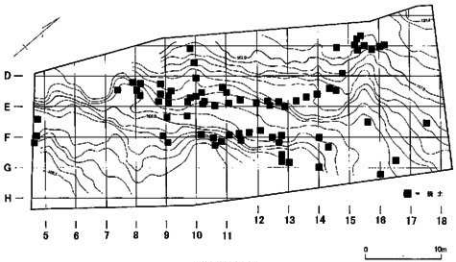
遺跡の土層は、上述したシルト～砂の河川堆積物を主体とし、その堆積の間から火山灰が３枚検出されている。これらは上に位置するものから順に樽前ａ（Ta－ａ）、駒ケ岳c2（Ko－c2）、樽前ｃ（Ta－ｃ）火山灰とみられ、遺構及び遺物はTa－ｃの直上付近で多く検出された。

遺構と遺物

検出された遺構は焼土76か所、集石１か所、フレイク・チップの集中域が２か所である。これらは調査区の長軸方向、概ね茶路川の流れに沿うように検出されている。また、河川堆積物を挟んで複数の焼土が検出された区域もある。焼土には炭化材のほか、骨片が多く含まれており、なかには黒曜石の微細な剥片が混じるもの、ベンガラがまかれているものもある。

出土した遺物は、土器2,739点、石器等22,982点である。土器は縄文時代晩期終末の縁ヶ岡式から続縄文時代初頭とみられるもので、石器も同時期のものである。石器等のほとんどは焼土の水洗篩別により出土したフレイク・チップであるが、焼土中からは石鏃、スクレイパーなどの剥片石器も合計100点近く出土している。

遺跡位置図　　国土地理院発行の５万分の１地形図「上茶路」を使用



遺構位置図

遺跡遠景

焼土（F 32）検出状況

土器（No.2）出土状況

虎杖浜（こしたんぷ）2遺跡（Ｊ－10－１）

事 業 名：一般国道36号白老町虎杖浜改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
所 在 地：白老郡白老町字虎杖浜321－１
調査面積：1,770㎡
発掘期間：平成18年５月８日～６月30日
調 査 員：遠藤香澄、阿部明義

遺跡の概要

遺跡は白老町の西端部、登別市との境界に近い虎杖浜地区の標高約50ｍの段丘上に位置する。段丘の南北には倶多楽火山を源とするアヨロ川とポンアヨロ川が開析している。遺跡の真下には、国道36号虎杖浜隧道が貫通している。「虎杖浜」という地名は、アイヌ語のクッタルシ（Kuttar-us・i：オオイタドリ・群生している・所）をイタドリの漢名である「虎杖」を意訳し名づけたといわれる。

虎杖浜２遺跡は昭和初期から知られている。昭和52（1977）年には白老町教育委員会による試掘調査が行われ、縄文時代前期のＡ・Ｂ２か所の貝塚を有する大規模な集落跡の存在が確認されている。国道拡幅のための台地の開削工事に伴い、事前調査として平成９（1997）年に白老町教育委員会、平成11～13（1999～2001）年に北海道埋蔵文化財センターが計7,520㎡の発掘調査を行った。

今年度の調査区は、過年度に発掘調査が行われた台地上の調査区の東側斜面である。調査区北部はトンネルの真上にあたり、以前の工事のため崖が掘削され平坦になっている。もとは台地上に形成された貝塚から押し出されたとみられる貝層が堆積していた（「撹乱貝層」）。調査区中部～南部は斜面で、有珠ｂ降下軽石層（1663年降下）下に遺物包含層である黒色土が20～90㎝堆積していた。

遺構と遺物

平成11～13年の発掘調査では、住居跡28軒、土坑墓３基、土坑19基、焼土49か所、盛土遺構、貝塚が検出され、土器・石器等10万点を超える遺物が出土している。土器では、東北地方からの搬入と考えられる縄文時代早期の物見台式や前期の大木２ａ式も出土している。貝塚および撹乱貝層からは、多数の動物遺存体とともに、土器・石器のほか銛頭・骨針・釣り針・装飾品などの骨角器や貝製品、人骨の一部も出土した。また送り場の可能性が考えられる出土状況も見られた。

今年度の調査の結果、上記の「撹乱貝層」と焼土６か所が検出された。焼土のうち１か所は厚さ20㎝ほどの被熱層をもち、焼土の周辺の斜面上方と下方に遺物が散在していた。「撹乱貝層」は調査区北端部約120㎡の範囲に最大約2.5ｍの厚さをもって堆積していた。貝類は破砕されたものが多く、現代のゴミが多量に含まれている。

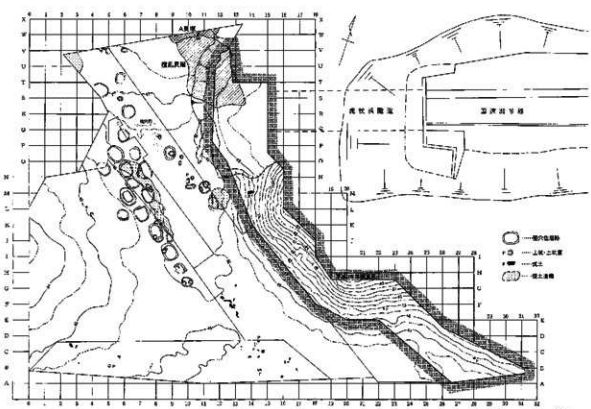
遺物は約1,200点出土した。内訳は土器約290点、石器等約900点、骨角器17点である。土器は縄文時代前期の円筒土器下層ａ式を主体とし、縄文時代早期～晩期のものが出土している。石器等はフレイクが大半を占める。定形的な石器ではつまみ付きナイフ・石斧・北海道式石冠・石錘が多い。特に頁岩製つまみ付きナイフは、長さ16㎝に及ぶ大型のものがある。骨角器は、銛頭・骨針・装身具など数少ないながらもみられる。

動物遺存体は、撹乱貝層から手取りのほか水洗により約300kgを回収した。内容は平成12・13年の調査におおむね準じる。貝類は推計約215kgで、ヤマトシジミ・コタマガイ・ウバガイ・イガイ・アサリ・マガキなどの二枚貝、チヂミボラ・ヒメエゾボラなどの巻貝がある。ウニは推計約60kgと多量で、大部分がムラサキウニとみられる。魚類はブリ・マダイ・ヒラメ・カサゴなど暖流域に見られるものが多い。鳥類はわずかにみられる。哺乳類は、陸棲動物ではシカが最も多く、海獣類ではアシカ・オットセイなどがある。

国土地理院発行の２万５千分の１地形図『登別温泉』を使用

虎杖浜２遺跡位置図

調査状況



遺構位置図（平成９～18年調査）

白滝遺跡群

事 業 名：一般国道450号白滝丸瀬布道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部
発掘期間：平成18年５月10日～10月31日
整理期間：平成18年４月３日～平成19年３月30日
調 査 員：熊谷仁志、鈴木宏行、坂本尚史、大泰司統、直江康雄

調査遺跡

遺跡名（登載番号）	所　　在　　地	調査面積
旧白滝５遺跡（Ⅰ－20－28）	紋別郡遠軽町旧白滝417	4,656㎡

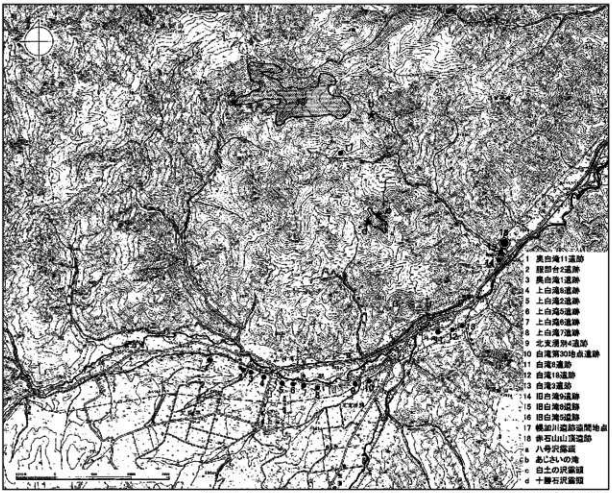
整理遺跡

遺跡名（登載番号）	所　　在　　地	遺物点数
服部台２遺跡（Ⅰ－20－13）	紋別郡遠軽町奥白滝18－3	798,648
奥白滝１遺跡（Ⅰ－20－50） 平成12年度調査部分	紋別郡遠軽町奥白滝183－2	182,922
白滝８遺跡（Ⅰ－20－58）	紋別郡遠軽町白滝146－1、146－2	4,030
白滝18遺跡（Ⅰ－20－92）	紋別郡遠軽町白滝145、139－1	47,762
白滝３遺跡（Ⅰ－20－36）	紋別郡遠軽町白滝106他	41,271
旧白滝５遺跡（Ⅰ－20－28） 平成15年度調査部分	紋別郡遠軽町旧白滝413	261,600

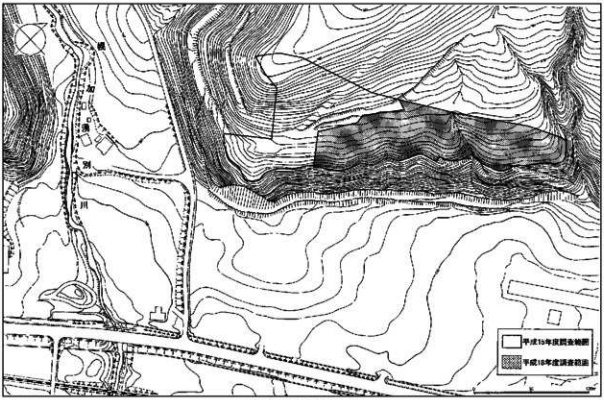
白滝遺跡群の概要

遠軽町白滝地区（旧白滝村）は、北海道の屋根といわれる大雪山系の北東山麓に位置する。平成17年の市町村合併により、白滝村から遠軽町に区画されることとなった。白滝市街地の北西約６㎞には、国内有数の黒曜石の産地として知られる赤石山がある。白滝地区を東西に流れる湧別川とその支流の支湧別川の河岸段丘上には旧石器時代の遺跡が多数所在し、それらは白滝遺跡群と総称されている。特に赤石山に通じる八号沢川と湧別川との合流点付近には、白滝第13地点をはじめ、服部台、白滝第32地点、白滝第33地点など、学史的に著名な遺跡が集中している。また、1997年には新たに約20万㎡が国指定遺跡に追加され、すでに指定済みの「白滝遺跡」（白滝第13地点遺跡）と合わせて「白滝遺跡群」として名称変更された。

当センターでは、高規格道路の建設に伴い平成７年以来、上白滝地区を中心に98,970㎡の発掘調査を行い、約463万点、10ｔの遺物を確認している。そのほとんどが黒曜石製の遺物で、原産地に立地する遺跡の性格を示している。調査は工事工程に伴い、湧別川上流の上白滝地区から白滝地区、旧白滝地区へと下流へ向かって進行している。今年度は史跡白滝遺跡群より下流側の旧白滝地区、幌加湧別川との合流点付近に位置する、旧白滝５遺跡の調査を行った。



赤石山（原石山）と遺跡の位置図　国土地理院発行の5万分の1地形図「白滝」を使用



遺跡と周辺の地形

旧白滝５遺跡の概要

遺跡の概要

旧白滝５遺跡は、湧別川と幌加湧別川の合流点付近の段丘面上に立地している。幌加湧別川の上流には、あじさいの滝、幌加沢の露頭など黒曜石の大規模な露頭や、学史上有名な幌加川遺跡遠間地点が位置している。

遺跡が立地する河岸段丘面は天狗平面（高位部・標高390m前後）、上白滝面（中位部・標高360～370m）に相当し、前者は平坦面、後者は緩斜面地形を呈している。平成15年度には、高位部および中位部の一部の調査を実施し、高位部では細石刃石器群（峠下型）、中位部では側縁鋸歯状の尖頭器を特徴とする石器群などが主に確認された。今年度は中位部の４,656㎡を調査した。

基本土層は大まかにⅠ層：表土、Ⅱ層：黄褐色土(包含層)、Ⅲ層：にぶい黄褐色～灰白色土である。Ⅲ層は約３万年前降下の大雪御鉢平降下軽石層と推定される。また、基本土層の間層には、緩斜面地形の影響による砂礫の斜面堆積層、沢状地形に形成された水成堆積層が確認された。

遺構と遺物

遺構は、後述する遺物集中範囲③（調査区Ｌ～Ｎ44～46）から、炭化物集中が２か所検出された（Cb－５・６）。

遺物は、約20万点が出土した。全て石器で、黒曜石製のものが大部分を占める。複数の大規模な遺物集中範囲が確認され、これらは大まかに①～⑤に区分（図参照）が可能である。各範囲の出土遺物の内容には特徴がみられた（表参照）。以下に概要を述べる。

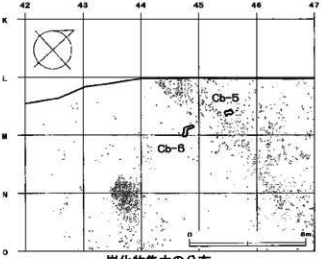
①・②区は木葉形尖頭器を特徴とする石器群で、両者は同一石器群の可能性がある。この他の特徴的な石器として、側縁鋸歯状の尖頭器が①区から、石刃石器群（石刃核・石刃・掻器・削器）が②区から、主に出土している。

③区は石刃技法を特徴とする石器群である。打面はやや粗い調整打面、頭部は無調整、稜調整が希薄などの特徴がある。石刃は長さ15㎝前後、幅４～５㎝、厚さ１㎝程度と大型のものが主体で、打面も幅１～４㎝と大型である。石刃・石刃核と同一母岩視される大型の剥片がまとまって出土しており、石器製作工程の復元が期待できる。

③区の石器群は、これまでの白滝遺跡群の調査では確認されていないもので、編年的位置づけには石器製作技術や組成などを踏まえた慎重な検討を要するだろう。なお、遺物に近接して検出された炭化物集中を用いて放射性炭素年代測定を行う予定である。

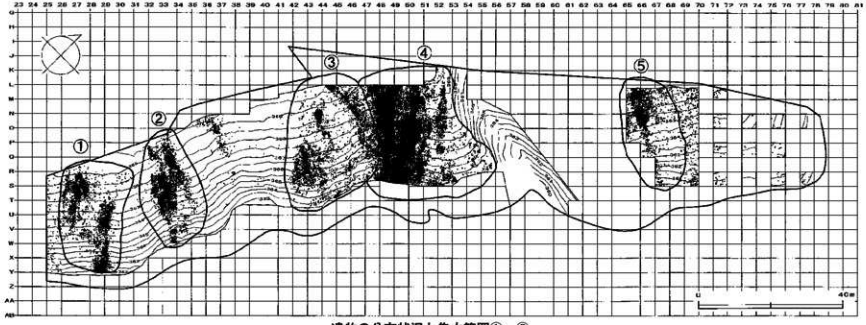
④区は大量の石器が密集して出土し、遺物点数は同範囲だけで12万点以上に及ぶ。地区中央部からは沢地形が確認され、遺物は沢の周辺および沢の水成堆積土中（砂礫・シルト・粘土の互層）に認められた。遺物の出土状況から、複数の石器群が混在している可能性が高く、今後、接合作業を介しての石器群の分離作業が必要である。調査段階で確認した石器には、尖頭器、有舌尖頭器、舟底形石器、彫器、掻器、削器、錐形石器、石刃核、石核などがある。

⑤区は小型舟底形石器石器群である。尖頭器、石刃核・石核、粗い加工の舟底形石器、舟底形石器を製作する際に生じる特徴的な側面調整剥片などが出土している。石材の搬入から素材の生産、製品の加工まで、一連の作業工程が復元できる可能性が高い。



炭化物集中の分布

	遺物集中範囲	主な出土遺物の内容	遺構・その他	備考
①	調査区 25～30	尖頭器・削縁剥片状の小型(7cm大)尖頭器・石鏃・楔器・削器・石刃技法	フレイク集中 1か所 (FC－4)	平成15年度調査ブロックに連続する
②	調査区 31～40	尖頭器・石刃技法		①と②は同一石器群の可能性がある
③	調査区 41～45	石刃技法(大型・連続剥離打痕)・削器・彫器	炭化物集中 2か所 (CB－5・6)	
④	調査区 46～55	石刃技法・有舌尖頭器・尖頭器・舟底形石器・彫器・楔器・削器・錐状石器・貝殻製品の多出		旧河地形周辺に分布。沢の堆積土中にも遺物多。複数の石器群が混在する可能性あり
⑤	調査区 65～67	尖頭器・舟底形石器・削器		



遺物の分布状況と集中範囲①～⑤

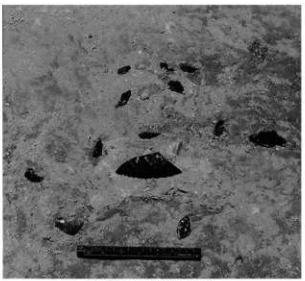
調査状況

調査状況

遺物出土状況

遺物出土状況

尖頭器（集中範囲①）



尖頭器（集中範囲②）

炭化物集中と大型剥片（集中範囲③）

石刃のまとまり（集中範囲④）

舟底形石器と尖頭器（集中範囲④）

石核（集中範囲⑤）

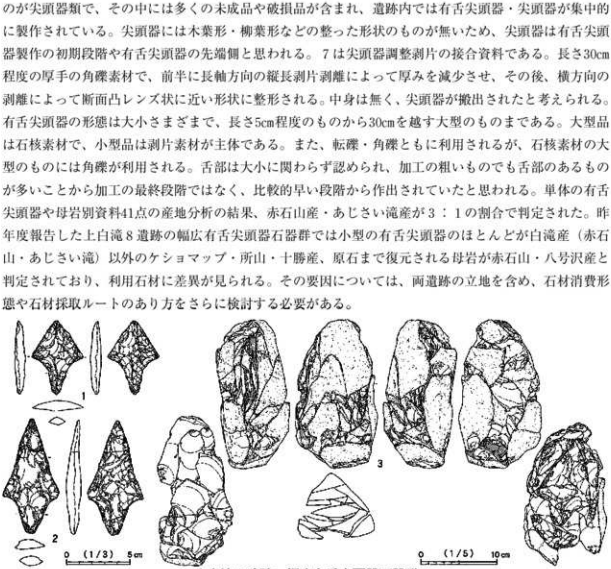
旧白滝５遺跡出土遺物（Ｓ＝1/2）

白滝遺跡群の整理

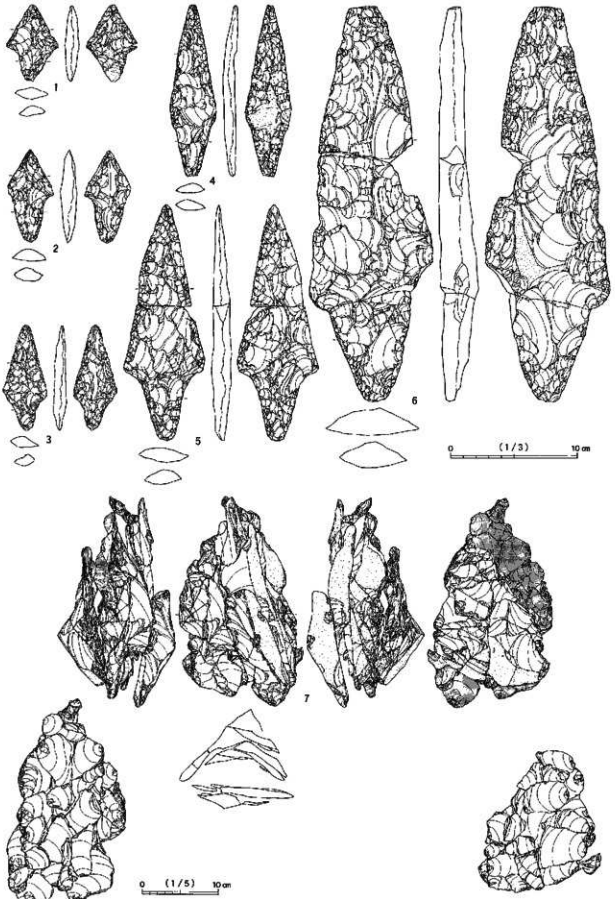
今年度は服部台２・奥白滝１（12年度調査分）・白滝８・白滝18・白滝３・旧白滝５遺跡（15年度調査分）の二次整理と今年度調査した旧白滝５遺跡の一次整理を行った。報告書作製の順番によって作業内容は異なり、今年度報告の服部台２・奥白滝１遺跡は『白滝遺跡群Ⅶ』の編集作業を、19年度報告予定の白滝８・白滝18・白滝３、20年度報告予定の旧白滝５遺跡（15年度高位部）は図版作製作業を行い、同じく20年度報告予定の旧白滝５遺跡（15年度中位部）は図化・データ処理作業を行った。

ここでは、白滝18遺跡の幅広有舌尖頭器石器群の状況を説明する。白滝18遺跡は、服部台２遺跡・上白滝８遺跡が分布する上白滝地区、旧白滝５遺跡が分布する旧白滝地区の間の白滝地区に位置し、旧白滝村の市街地から１km東の湧別川右岸段丘上に立地する。隣接する上白滝地区・旧白滝地区はそれぞれ黒曜石の原石山である赤石山から流れ出す八号沢川・幌加湧別川と湧別川の合流点付近に位置し、両地区内には大規模な遺跡が分布し、特に上白滝地区には大規模遺跡が集中している。一方、白滝地区は赤石山山頂部に沢伝いに登るルートが無く、遺跡も比較的小規模である。

白滝18遺跡からは47,762点の石器が出土し、幅広有舌尖頭器石器群はそのうちの99%を占める。主な器種は有舌尖頭器（93点、点取り遺物中、以下同じ）・尖頭器（115点）・両面調整石器（31点）・彫器（４点）・掻器（14点）・削器（32点）・錐形石器（３点）・石核（４点）である。大部分を占めるのが尖頭器類で、その中には多くの未成品や破損品が含まれ、遺跡内では有舌尖頭器・尖頭器が集中的に製作されている。尖頭器には木葉形・柳葉形などの整った形状のものが無いため、尖頭器は有舌尖頭器製作の初期段階や有舌尖頭器の先端側と思われる。７は尖頭器調整剥片の接合資料である。長さ30cm程度の厚手の角礫素材で、前半に長軸方向の縦長剥片剥離によって厚みを減少させ、その後、横方向の剥離によって断面凸レンズ状に近い形状に整形される。中身は無く、尖頭器が搬出されたと考えられる。有舌尖頭器の形態は大小さまざまで、長さ5cm程度のものから30cmを越す大型のものまである。大型品は石核素材で、小型品は剥片素材が主体である。また、転礫・角礫ともに利用されるが、石核素材の大型のものには角礫が利用される。舌部は大小に関わらず認められ、加工の粗いものでも舌部のあるものが多いことから加工の最終段階ではなく、比較的早い段階から作出されていたと思われる。単体の有舌尖頭器や母岩別資料41点の産地分析の結果、赤石山産・あじさい滝産が３：１の割合で判定された。昨年度報告した上白滝８遺跡の幅広有舌尖頭器石器群では小型の有舌尖頭器のほとんどが白滝産（赤石山・あじさい滝）以外のケショマップ・所山・十勝産、原石まで復元される母岩が赤石山・八号沢産と判定されており、利用石材に差異が見られる。その要因については、両遺跡の立地を含め、石材消費形態や石材採取ルートのあり方をさらに検討する必要がある。



上白滝８遺跡　幅広有舌尖頭器石器群



白滝18遺跡　幅広有舌尖頭器石器群

前サンル１遺跡（Ｆ－21－64）

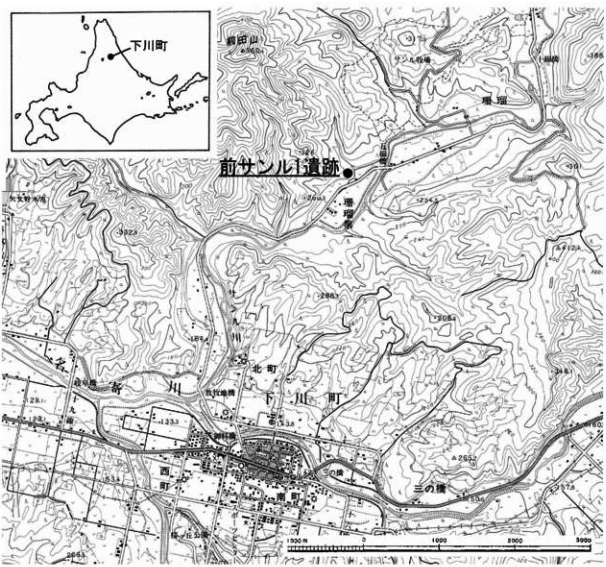
事 業 名：天塩川サンルダム建設事業の内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局旭川開発建設部
所 在 地：上川郡下川町珊瑠（旧地番248、250）
調査面積：922㎡（東地区533㎡、西地区389㎡）
発掘期間：平成18年５月９日～６月19日
調 査 員：中山昭大、山中文雄

遺跡の概要

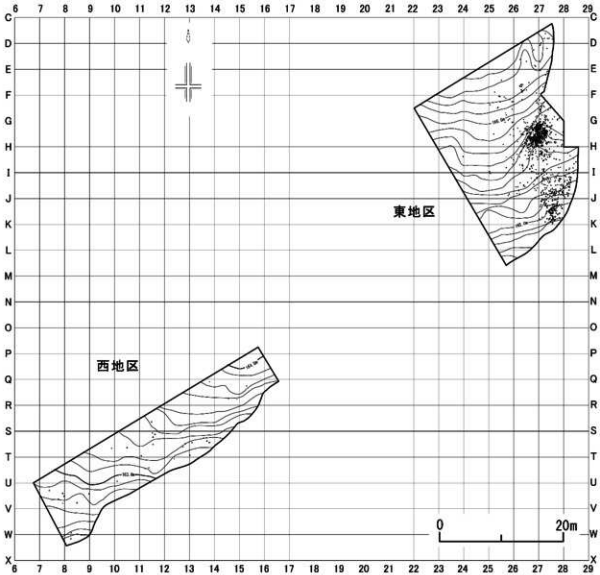
遺跡は下川町の市街地から北北東へ直線距離で約４km離れた地点に位置する。名寄川の支流サンル川と四線の沢の合流地点に程近い沖積錐に立地する。標高は約165ｍである。土層はⅠ層：黒褐色の腐植土からなる表土、Ⅱ層：褐色土、Ⅲ層：にぶい黄褐色土、Ⅳ層：漸移層、Ⅴ層：褐色土で、遺物は主にⅢ層～Ⅴ層から出土している。

遺構と遺物

発掘区域は２か所に分かれており、東地区・西地区と名付けて調査を行った。両地区とも遺構は検出されず、尖頭器やスクレイパーの出土した東地区はBI石器時代の、遺物数の少ない西地区は磨製石斧片とB調査で土器片が数点出土しており縄文時代の可能性がある。遺物は石器等のみ1,555点で、器種は尖頭器、スクレイパー、石核、石斧、すり石、フレイク類である。



遺跡位置図　国土地理院発行の５万分の１地形図「サンル」「下川」を使用



遺物分布図

遺物出土状況

調査終了

占冠原野１遺跡（Ｆ－16－11）

事 業 名：北海道横断自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：東日本高速道路株式会社北海道支社
所 在 地：勇払郡占冠村字占冠原野96－１、2319－１
調査面積：4,702㎡
発掘期間：平成18年６月１日～７月７日
調 査 員：鎌田　望、新家水奈、立川トマス

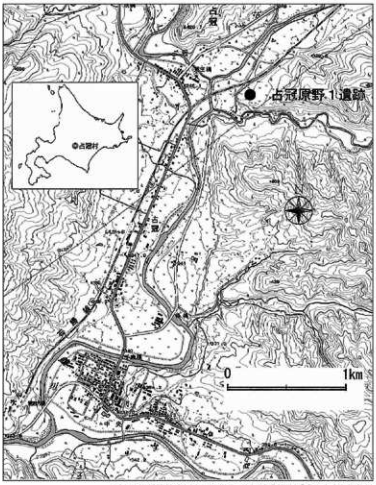
遺跡の概要

遺跡はＪＲ石勝線占冠駅から北へ1.6km、占冠市街地からは北へ2.6kmのところにある。集落の東側を流れる鵡川とシム川の合流点の北東、両川に挟まれた標高約360mの段丘上に位置する。現況は牧草地である。

遺構と遺物

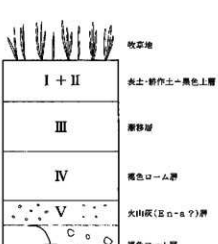
検出遺構はＴピット127基、土坑１基である。出土遺物は石鏃１点、Ｒフレイク４点、フレイク９点の計14点、出土層位はⅣ層である。

Ｔピットの大半は緩斜面からシム川の崖にさしかかる地形の変換点に構築され、等高線と直交して列をなす。底面の長短比と杭跡の有無で分類した苫東分類に従えば、長短比９以上、長径２m以上の細長いタイプＡ１型が15.7%、２ｍ未満のＡ２型が42.5%と、全体の58.3%を占めている。長短比５～８で杭跡を持たないＢ１型が24.4%、長短比４以下で杭跡を持たないＣ１型が7.9%、同じく杭跡を持つＣ２型が9.4%である。Ｃ２型のうち５基は、杭跡が２列であった。

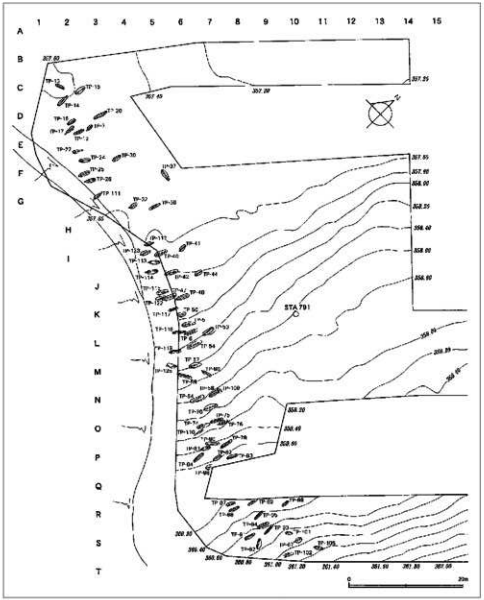


国土地理院発行の２万５千分の１地形図「占冠」「占冠中央」を使用

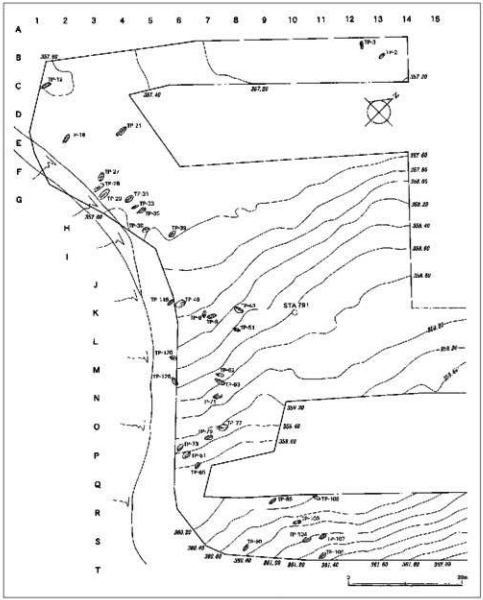
遺跡位置図



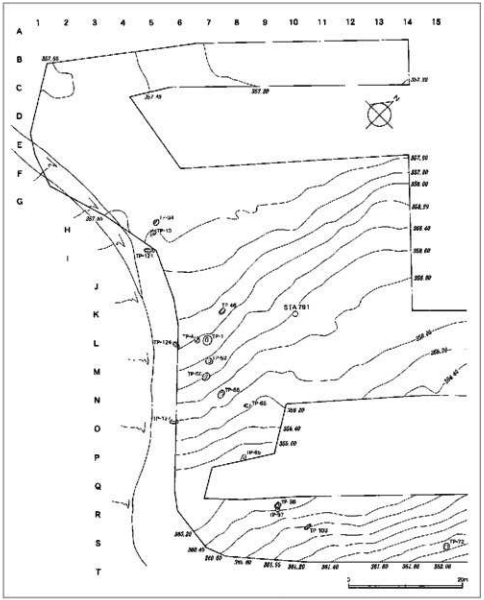
基本土層柱状図



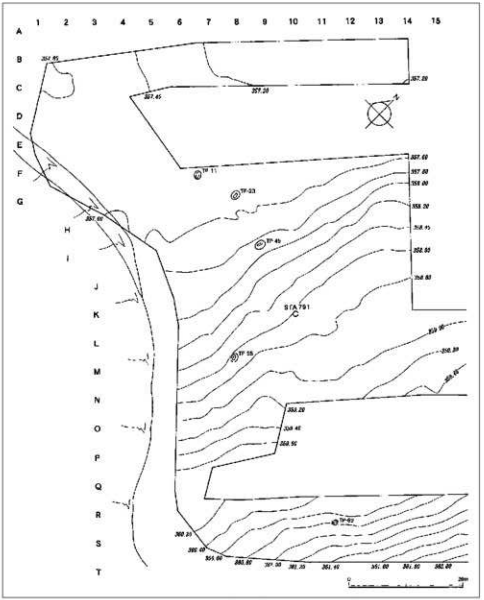
A型Tピット分布図



B型Tピット分布図



C型Tピット分布図



C２型Tピット分布図（杭跡２列のもの）

調査区遠景

Tピット群検出状況

Tピット群調査状況

TP－46断面

石倉１遺跡（Ｂ－15－29）・濁川左岸遺跡（Ｂ－15－22）

事　業　名：北海道縦貫自動車道函館名寄線建設工事埋蔵文化財発掘調査
委　託　者：東日本高速道路株式会社北海道支社
所　在　地：茅部郡森町字石倉395ほか（石倉１遺跡）、同401ほか（濁川左岸遺跡）
整理期間：平成18年４月１日～平成19年３月30日
調　査　員：鈴木　信、鎌田　望、新家水奈、柳瀬由佳

整理の概要

平成14・15・16年度に4,353㎡を調査した石倉１遺跡、平成16年度に3,660㎡を調査した濁川左岸遺跡Ｃ・Ｄ・Ｅ地区の整理作業を行っている。調査報告書の刊行は平成19年度である。

石倉１遺跡　検出遺構は住居跡４軒、土坑19基、集石３か所である。住居跡は縄文時代後期初頭～前葉のものである。土坑は縄文時代中期と推定するもの10基、中期～後期と推定するもの２基、後期前葉６基、後期前半１基である。集石は後期前葉の所産である。出土遺物は64,753点（土器58,914点、石器等5,839点）である。土器は縄文時代後期初頭～前葉のもの92.7%、中期前半6.7%、中期後半0.2%と、これらで99.6%を占める。

濁川左岸遺跡　検出遺構は住居跡８軒、土坑94基、石組炉５か所、焼土23か所、小ピット212基、配石１か所、剥片集中１か所、埋設土器１か所である。住居跡は縄文時代前期と推定するもの１軒、中期前半２軒、後期前葉５軒である。土坑は後期前葉のもの45基（墓２基、墓の可能性のあるもの11基）、後期前葉と推定するもの６基（墓１基、墓の可能性のあるもの２基）、中期前半もしくは後期前葉14基（墓10基、墓の可能性のあるもの４基）、中期前半と推定するもの２基、前期～中期と推定するもの１基、前期後半１基、時期不明２基である。配石は後期前葉の墓の可能性のある土坑に伴う。埋設土器は中期前半のものである。出土遺物は113,887点（土器102,384点、石器等11,503点）である。土器は縄文時代後期初頭～前葉のもの89.2%、中期前半6.1%、前期後半4.4%と、これらで99.7%を占める。

石倉１遺跡　出土遺物点数一覧

総　計

調査年	属性	土器	剥片石器	礫石器	その他	計
平成14年	遺　構	2	0	103	0	105
	包含層	1,220	100	124	2	1,446
	計	1,222	100	227	2	1,551
平成15年	遺　構	4	0	5	0	9
	包含層	22,906	2,532	887	11	26,336
	計	22,910	2,532	892	11	26,345
平成16年	遺　構	1517	65	152	1	1,735
	包含層	33,265	1,359	490	8	35,122
	計	34,782	1,424	642	9	36,857
総　計		58,914	4,056	1761	22	64,753

土器内訳

調査年	属性	Ⅰa	Ⅱb	Ⅲa	Ⅲb-1	Ⅳa	Ⅳb	Ⅴ	Ⅵa	Ⅵb	計
平成14年	遺　構	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
	包含層	0	0	177	0	909	1	0	0	133	1,220
	計	0	0	177	0	911	1	0	0	133	1,222
平成15年	遺　構	4	0	0	0	4	0	0	0	0	4
	包含層	3	0	2,433	25	20,379	23	1	42	0	22,906
	計	3	0	2,433	25	20,383	23	1	42	0	22,910
平成16年	遺　構	0	0	16	0	1,501	0	0	0	0	1,517
	包含層	0	1	1,311	118	31,835	0	0	0	0	33,265
	計	0	1	1,327	118	33,336	0	0	0	0	34,782
総　計		3	1	3,937	143	54,630	24	1	42	133	58,914

Ⅰa：縄文時代早期前半　Ⅱb：縄文時代前期後半　Ⅲa：縄文時代中期前半
Ⅲb：縄文時代中期後半　Ⅳa：縄文時代後期前葉　Ⅳb：縄文時代後期中葉
Ⅴ：縄文時代晩期　Ⅵa：続縄文時代前半　Ⅵb：続縄文時代後半

濁川左岸遺跡　出土遺物点数一覧

総　計

	土器	剥片石器	礫石器	土製品	石製品	計
遺　構	3,555	351	1,080	2		4,988
包含層	98,829	7,965	2,043	46	16	108,899
計	102,384	8,316	3,123	48	16	113,887

土器内訳

	Ⅱb	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳ	Ⅳa	Ⅵb	Ⅵ	計
遺　構	156	974			2,424	1		3,555
包含層	4,335	5,263	4	108	88,873	222	24	98,829
計	4,491	6,237	4	108	91,297	223	24	102,384

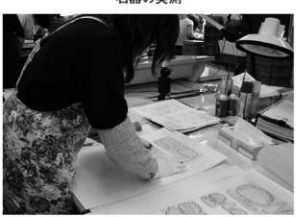
復元土器

遺構図作成

写真撮影

土器の実測

石器の実測


遺物図版作成

写真図版作成

柏木川４遺跡（Ａ－04－21）

事　業　名：柏木川基幹河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委　託　者：北海道石狩支庁
所　在　地：恵庭市柏木町610、612ほか
調査面積：12,600㎡
発掘期間：平成18年５月８日～10月30日
調　査　員：谷島由貴、佐藤剛、吉田裕吏洋

遺跡の概要

柏木川４遺跡は、北海道中央部、石狩低地帯の恵庭市に所在し、山裾からの緩斜面を貫流する柏木川の右岸に立地する。

調査範囲は標高約43～45ｍの河岸段丘上と河川氾濫原の低地からなる。ほとんどの遺構は河岸段丘上において検出された。低地からは木製品などが出土している。

調査は平成16年度から継続して行われ、調査面積は３年間で35,210㎡に及ぶ。平成18年度は12,600㎡の調査を行い、現地発掘調査は終了した。

基本土層はⅠ層：表土層、Ⅱ層：樽前ａ降下軽石層（Ta－ａ）、Ⅲ層：黒色土層（部分的に白頭山－苫小牧火山灰＜Ｂ－Tm＞と樽前ｃ降下軽石層＜Ta－ｃ＞挟在）、Ⅳ層：暗褐色土層、Ⅴ層：恵庭ａ降下軽石層（En－ａ）である。

遺構と遺物

平成18年度の調査では竪穴住居跡７軒、土坑約200基、焼土約160か所等を検出した。竪穴住居跡は縄文時代中期前半に構築されたものである。土坑の大半は縄文時代晩期に属するもので、多くは遺物を伴わないが、KP－386、KP－397など副葬品を伴う土坑も少数ある。また、擦文文化期の土坑も10基ほど確認している。焼土は縄文時代中期～晩期、擦文文化期のものである。

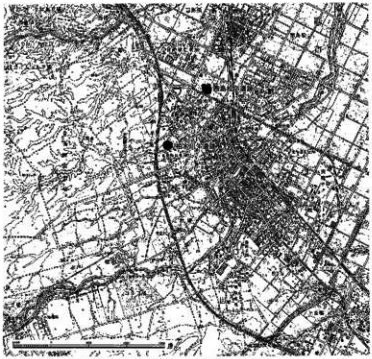
KP－397はTa－ｃ層より下位の黒色土で確認された。土坑墓の規模は長径80cm、短径60cm、深さ27cmの楕円形を呈し、坑底は丸みがある。覆土は２層で上部に黒色土があり、下部は暗褐色土の埋め戻しである。出土した遺物は足形付土製品、手形付土製品、把手付双口土器、土器４点、石斧の計８点が出土している。石斧は上部の黒色土から出土したが、他は下部の埋め戻された暗褐色土から出土している。出土した土器は縄文時代晩期の大洞Ａ式相当の在地の型式であるタンネトウＬ式・幣舞（ぬさまい）式土器である。この土坑の時期は土器型式から縄文時代晩期後葉と特定される。

擦文文化期の土坑は２基が対を成し20～30ｍの間隔で５か所ほど検出されている。隅丸長方形を呈し、覆土の上部に炭化物がみられる。一部のものは炭化物の上に焼土が確認されている。

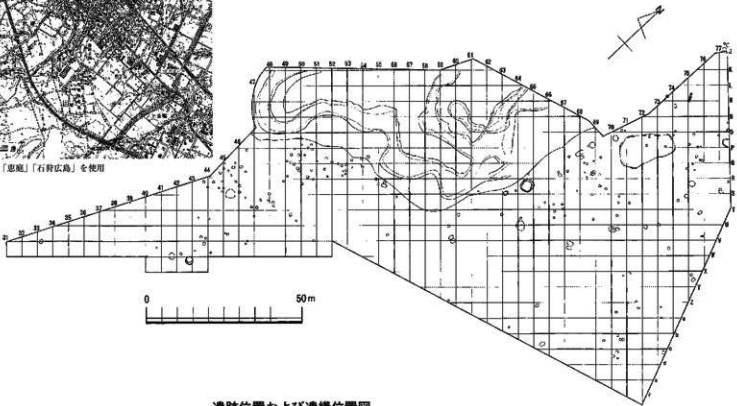
平成18年度の遺物は縄文時代晩期を主体に中期・後期、擦文文化期のものが合計約38,500点出土している。内訳は、土器等約20,800点、石器等約17,700点、木製品40点である。

低地の河川氾濫原では小砂利を主体とした堆積物が低地のほぼ全面でみられるが、この堆積中には後期以前の遺物がまばらに出土している。縄文時代後期以前はやや急流であったと推定される。

低地の大部分は、上位をＢ－Tm層とTa－ｃ層を挟んだ黒色土に覆われ、縄文時代後期末や縄文時代晩期、擦文文化期の河道が検出されている。縄文時代後期中葉～後葉の河道では、舟形の木製品、皿状木製品、槌状木製品、補修孔に紐の付着した土器片、アンギンとみられる繊維製品、漆製品などが出土している。これらは河道の川底及び岸辺の傾斜面から出土している。その周囲では焼土や一括土器などがみられる。縄文時代後期以前の河道からは、流木が出土しているが木製品は出土していない。縄文時代晩期以降の河道は有機質遺物の保存に適さない状態で、流木なども出土していない。



国土地理院発行の２万５千分の１地形図「恵庭」「石狩広島」を使用



遺跡位置および遺構位置図

KP－358（前）・359（中）・360（奥）遺物出土状況

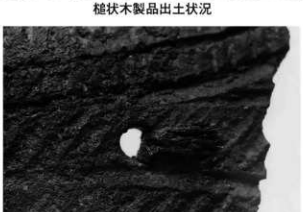
KP－360遺物出土状況

KP－386遺物出土状況

旧河道Ⅰ調査状況

木製品出土状況

槍状木製品出土状況



補修孔に繊維が残存する土器

西島松（にしのしまつ）2遺跡（A－04－35）

事 業 名：柏木川基幹河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道石狩支庁（札幌土木現業所）
所 在 地：恵庭市西島松306番、501番地先河川敷地
調査面積：3,920㎡
発掘期間：平成18年５月８日～10月31日
整理期間：平成18年４月１日～平成19年３月30日
調 査 員：佐藤和雄、土肥研晶、吉田裕吏洋

遺跡の概要

遺跡は、ＪＲ恵み野（めぐみの）駅から北西約700m、柏木川とその支流であるキトウシュメンナイ川に挟まれた標高約28mの国道36号に面した沖積低地上に立地する。今年度は発掘調査の２年目にあたる。

恵庭市内の西方を流れる柏木川流域は、市内でも遺跡密度の濃い地域で、両岸には数多くの遺跡が登録されているが、なかでも本地域は、支流の対岸にも遺跡が分布するため、東西を遺跡に挟まれた３列に遺跡が分布する地域となっている。本遺跡の下流側には、昨年度までに現地調査を終了した西島松３・５遺跡が隣接してならび、国道を挟んだ上流側には柏木川11・13遺跡が、柏木川の対岸には、西島松９・10遺跡、キトウシュメンナイ川の対岸には西島松１・４遺跡が分布する。河川に挟まれた西島松２・３・５遺跡は、おおよそ縄文時代全般を通して遺構や遺物の密度が濃いのが特徴で、大半が削平を受けているにもかかわらず、毎年多くの遺構や遺物が検出されている。

基本土層は、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土であるが、Ⅱ層の上面には、樽前ａ降下軽石層（Ta－ａ）が部分的に残り、さらにⅡ層は、次の３つの層に分けた。

Ⅱａ層：　黒色土層で続縄文時代以降の包含層
Ⅱｂ層：　樽前ｃ降下軽石層が混じると思われる暗褐色土層で、縄文時代晩期後葉の包含層
Ⅱｃ層：　黒褐色土層で、縄文時代晩期以前の包含層

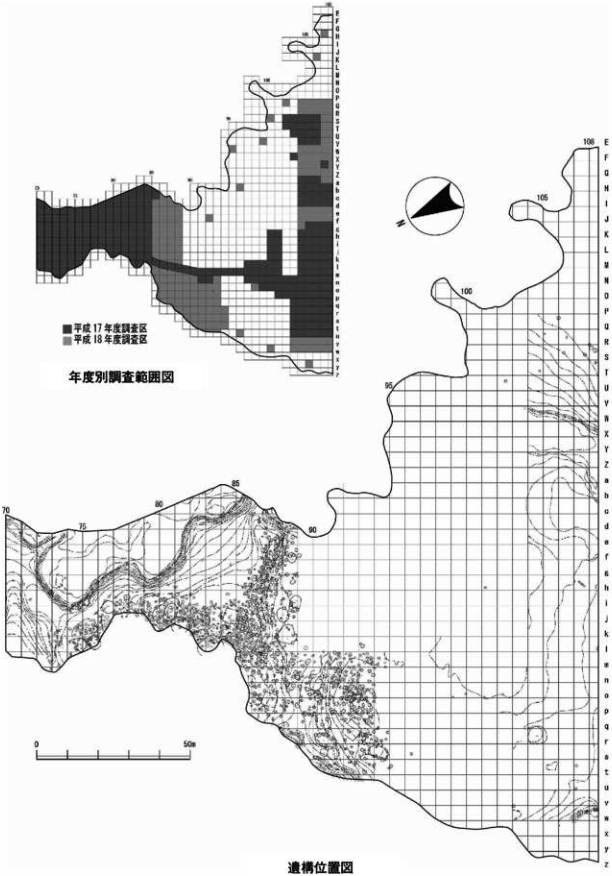
調査区内の低地部などに堆積するⅡａ層中には白頭山－苫小牧火山灰（Ｂ－Ｔｍ、10世紀後半降灰）、が見られ、さらにＢ－Ｔｍより上位に不明の火山灰の層が薄く堆積していることが観察された。

遺構の覆土では、樽前ｃ1降下軽石層の堆積がみられるものもあった。

遺構と遺物

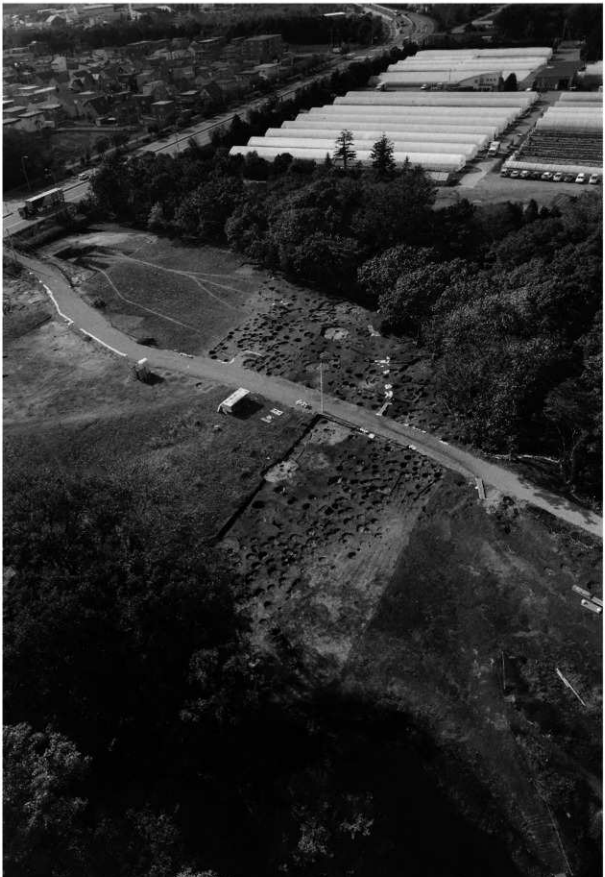
今年度検出された遺構は、住居跡17軒、土坑（土坑墓を含む）642基、焼土102か所、小ピット47基である。住居跡の内訳は、擦文文化期のものが４軒、このうち５×5m規模が２軒、２×2m規模が２軒、いずれもカマドをもち、煙道は南向きである。縄文時代のものは、前期後半の植苗式土器を伴うものが６軒、縄文時代後期中葉のものが３軒で、このうちの１軒からは出入口の痕跡が見つかった。残りの住居は時期不明である。土坑は昨年同様に多数検出され、昨年分と合わせると、すでに1,000基を超える数が見つかっている。その内の半数以上は縄文時代晩期後葉のものと推測され、分布密度の濃い場所では同時期の土坑が重なりあう状況で見つかっている。これらの土坑の平面形は円形で、大きいもので直径約140cm、小さいものでも直径約70cmの規模がある。土層は覆土下位にしか埋め戻しの痕跡が見られず、遺物が入っているものが少ないことが特徴である。

また、これとは別に、同時期の墓も見つかっている。平面形は小判形で、坑底面からは遺体の痕跡が見つかる場合が多い。出土した遺物は約142,000点で、土器では縄文時代晩期後葉のものが多いが、後期中葉・後葉や前期後葉の遺物も増えてきていることから、今後の調査で検出される遺構の時期も変化してくる可能性がある。



年度別調査範囲図

遺構位置図



調査区空撮

P 623　遺体確認状況

P 710　遺体確認状況

板小屋沢遺跡（Ｄ－20－１）・日の出２遺跡（Ｄ－20－６）

事 業 名：余市赤井川線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道後志支庁

所 在 地：余市郡赤井川村字日の出197－56ほか（板小屋沢）、字日の出313－４ほか（日の出２）

調査面積：600㎡（板小屋沢）

：2,400㎡（日の出２）

発掘期間：平成18年７月３日～９月29日

調 査 員：遠藤香澄、笠原　興

遺跡の概要

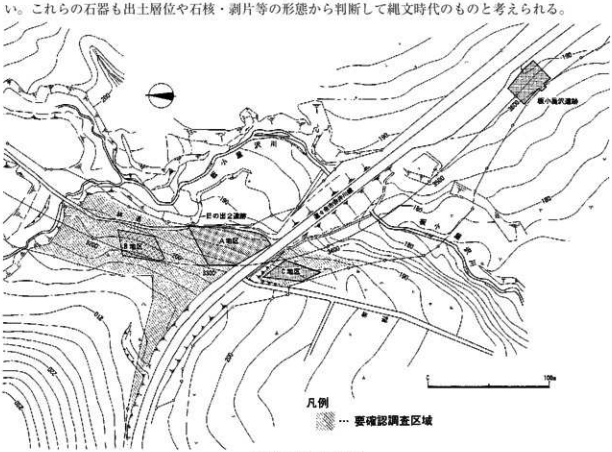
赤井川村は北海道の中央西部、後志地方の東北部に位置する。北は余市町、東は小樽市・札幌市と接している。市街地は火口原陥没で形成された標高150m付近のカルデラ底に形成されている。

調査した遺跡はいずれもカルデラ内に立地している。市街地の北、板小屋沢川右岸段丘上の標高約190m付近に日の出２遺跡、左岸の段丘から続く傾斜地の標高約180m付近の地に板小屋沢遺跡がある。日の出２遺跡では発掘調査範囲1,400㎡に加えて、確認調査対象範囲10,000㎡が設定されており、そのうち10%を発掘した。

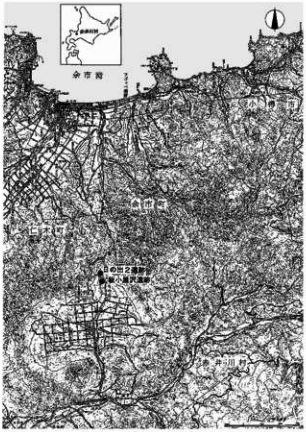
遺構と遺物

板小屋沢遺跡では遺構を検出しなかった。日の出２遺跡では時期不明の土坑を３基検出している。

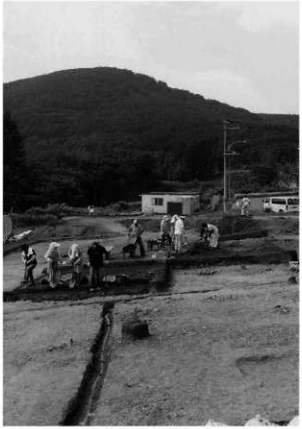
両遺跡とも縄文時代早期、中期と見なされる土器片が少量出土した。赤井川村は黒曜石の原産地として知られるが、両遺跡合計で約34,000点の黒曜石製遺物が出土した。これらは石器製作に伴う剥片や砕片が主体で、出土遺物全体の９割以上を占める。石器は剥片の一部に軽微な二次加工を施したものが多い。これらの石器も出土層位や石核・剥片等の形態から判断して縄文時代のものと考えられる。



遺跡と周辺の地形



遺跡位置図　国土地理院発行の5万分の1地形図「小樽西部」「仁木」を使用



板小屋沢遺跡調査状況

日の出２遺跡調査状況

3　現地研修会の記録

例年９月に実施してきた「現地研修会」は、「全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会」（公立埋文協）と「全国埋蔵文化財法人連絡協議会」（全埋協）の全国研修会が、当財北海道埋蔵文化財センターの担当で、合同研修会として行われることになったので、これに振り替えた。全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会は、第19回研修会であり、全国埋蔵文化財法人連絡協議会は、平成18年度研修会である。

以下にその合同研修会の日程、講師、講演題目、視察研修先などの概要を記しておく。

研修テーマ「保護ＶＳ公開―活用の接点を探る―」

期日：平成18年９月21日（木）～22日（金）　会場：北海道札幌市、千歳市、江別市

出席：53機関、104名

【主旨】　われわれの主たる業務である「埋蔵文化財の保護・保存並びに公開・活用」は文化財保護法に拠っているが、その文化財保護法はまた、天然記念物としての自然保護や文化的景観保護についても、謳っている。自然の保護と文化財の保護、そして、どこまで保護し、どこまで公開するか。その両立をめざし、探ってみる。

また、各方面において「個人情報保護法」に基づき「個人情報」の取り扱いに苦慮されているが、埋蔵文化財センターにおいても例外でなく、その対応について、探ってみる。

第１日目（９月21日）

13：00　開会行事

会長挨拶、幹事県挨拶、来賓挨拶

13：30　基調講演

村田良介（北海道斜里町総務環境部環境保全課長）

「知床世界自然遺産の保全と活用」

15：30　研修

管理部門部会

○太田三夫（太田法律事務所、弁護士）

「個人情報保護法と埋蔵文化財センターにおける個人情報について」

調査部門部会

事例発表

○石川　朗（釧路市立博物館、学芸専門員）

「北斗遺跡と釧路湿原」

○椙田光明（標津町ポー川史跡自然公園長）

「標津遺跡群と標津湿原」

○涌坂周一（羅臼町郷土資料室長）

「オホーツク文化遺跡より出土する動物と現生動物」

第２日目（９月22日）

研修視察：Ａコース（千歳市９：30～12：30）国指定史跡キウス周堤墓群、国指定史跡ウサクマイ遺跡群、調査中のキウス５遺跡、キウス９遺跡

研修視察：Ｂコース（江別市９：30～12：30）北海道立埋蔵文化財センター、国指定史跡江別古墳群江別市郷土資料館、江別市指定史跡江別チャシ

4　協力活動及び研修

(1) 協力活動

ア　発掘現場見学

＊遠軽町旧白滝５遺跡見学（「古田武彦と古代史を研究する会」）　6月15日
＊占冠村占冠原野１遺跡見学（「しむかっぷ遺跡ロマンの会」）　6月19日
＊占冠村占冠原野１遺跡見学（「占冠中央小学校」）　6月21日
＊千歳市キウス９遺跡見学・体験発掘（千歳市立千歳第二小学校６年生）　7月３日
＊白糠町上茶路遺跡見学（白糠町教育委員会）　7月８日
＊白糠町上茶路遺跡見学（白糠町立白糠小学校５年生）　7月13日
＊釧路町天寧１遺跡見学（釧路町立別保中学校）　7月18日
＊釧路町天寧１遺跡見学（釧路町立昆布森中学校）　7月25日
＊釧路町天寧１遺跡見学（恵庭市カリンパの会）　7月27日
＊釧路町天寧１遺跡見学（標茶縄文会）　8月３日
＊千歳市キウス５遺跡見学（北海道開発局札幌開発建設部千歳道路事務所）　8月10日
＊釧路町天寧１遺跡見学（釧路町立富原中学校）　8月23日・24日
＊千歳市キウス５遺跡・キウス９遺跡見学（北海道考古学会）　8月26日
＊釧路町天寧１遺跡職業体験学習（釧路町立別保中学校）　8月28日～９月１日
＊遠軽町旧白滝５遺跡見学（遠軽町立白滝小学校４年生）　9月20日
＊恵庭市西島松２遺跡・柏木川４遺跡見学（恵庭市郷土資料館）　9月24日
＊遠軽町旧白滝５遺跡見学
（ＮＰＯ法人ＮＰオホーツククラスター湧別川流域研究部会）　9月30日

イ　委員会・講演会

＊史跡最寄貝塚保存整備委員会（網走市）
《委員》千葉　1月19日
＊野付半島遺跡群調査事業に伴う職員派遣及び金属製品保存処理技術指導（別海町）
《派遣》田口　1月25日～27日
＊科学研究費補助金「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」に係わる年代測定分析結果説明（佐倉市）
《派遣》西田　2月11日～12日
＊第26回生存圏シンポジウム「木の文化と科学Ⅴ－先人に学ぶ木の利用」参加及び遺跡出土木製品データベース構築のための打ち合わせ（京都市）
《派遣》三浦　2月11日～13日
＊千歳市文化財調査報告書XXXⅢ『イヨマイ７・８遺跡』作成に係わる遺物写真撮影指導（千歳市）
《派遣》菊池　2月15日～16日
＊恵庭市郷土資料館平成17年度遺跡報告会（恵庭市）
《講師》土肥・村田　2月18日
＊千歳ライオンズクラブ３月例会講演（千歳市）
《講師》三浦　3月８日

＊史跡標津遺跡群、天然記念物標津湿原整備委員会
《アドバイザー》千葉　委任の日～平成20年３月31日
＊科学研究費補助金「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」
《研究協力者》西田　平成18年４月１日～平成19年３月31日
＊平成18年度北海道文化財・埋蔵文化財担当者会議（札幌市）
《派遣》村田　４月27日～28日
＊独立行政法人国立科学博物館依頼の石器（黒曜石製品他）のレプリカ製作に係わる遺物の搬送（東京都）
《派遣》鈴木（宏）　５月25日～26日
＊野付半島遺跡群調査事業に伴う職員派遣及び金属製品保存処理技術指導（別海町）
《派遣》田口　６月26日～28日
＊海峡土器編年研究会「第４回東北・北海道の縄文時代早期中葉土器群の再検討」（青森市）
《発表者》菅川・冨永　７月１日～２日
＊独立行政法人国立科学博物館依頼の石器（黒曜石製品他）のレプリカ製作に係わる遺物の搬送（東京都）
《派遣》直江　８月３日～４日
＊北海道大学アイヌ納骨堂におけるイチャルパ（北海道大学）
《参加者》西田　８月４日
＊史跡最寄貝塚保存整備委員会（網走市）
《委員》千葉　８月24日
＊平成18年度国立歴史民俗博物館共同研究に係る研究会の基幹研究「古代における生産と権力とイデオロギー」に係る現地調査（千歳市・江別市・札幌市）
《派遣》鈴木（信）　９月２日～３日
＊野付半島遺跡群調査事業に伴う職員派遣及び金属製品保存処理技術指導（別海町）
《派遣》田口　９月11日～15日
＊平成18年度アイヌ工芸展北九州会場に係る借用資料の開梱立合及び検品業務への協力（北九州市）
《派遣》田口　９月19日～20日
＊史跡標津遺跡群、天然記念物標津湿原整備委員会（標津町）
《アドバイザー》千葉　10月６日
＊北海道用地対策連絡協議会釧根地区部会定例総会講演会（釧路市）
《講師》工藤　10月12日
＊リヤムナイ３遺跡発掘調査展に係る職員派遣及び技術指導（共和町）
《派遣》笠原　10月13日
＊アイヌ人骨遺跡出土人骨イチャルパ（札幌医科大学）
《参加者》西田・遠藤　10月19日
＊史跡最寄貝塚保存整備委員会（網走市）
《委員》千葉　10月27日
＊北海道大学大学院共通授業科目「先住民研究特別講義（アイヌと北方少数民族）」におけるゲストスピーカー（札幌市）
《講師》田口　11月14日・21日

＊第20回東北日本の旧石器文化を語る会（山形県高畠町）
《発表者》鈴木（宏）　11月25日
＊平成18年度アイヌ文化工芸展北九州会場に係る借用資料の検品及び梱包立合業務への協力（北九州市）
《派遣》田口　11月26日～27日
＊平成18年度アイヌ文化工芸展札幌会場に係る借用資料の開梱立合及び検品業務への協力（札幌市）
《派遣》田口　12月７日
＊苫小牧市博物館における博物館大学講座『重要文化財美々８遺跡出土品にみるアイヌのくらし』講演（苫小牧市）
《講師》田口　12月９日
＊北海道考古学会遺跡調査報告会（北海道大学）
《発表者》谷島・影浦・広田　12月９日
＊北海道旧石器文化研究会（北海道大学）
《発表者》坂本・広田・山田　12月10日
＊臼尻Ｃ遺跡発掘調査に係る専門職員の指導派遣（函館市）
《派遣》田口　12月14日～15日

(2) **研修**

ア　研修・研究会参加

＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ等研究委員会（大阪市）
倉橋　６月29日～30日
＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会北海道・東北地区会議・北海道・東北地区コンピュータ等研究委員会（郡山市）
松本（昭）・倉橋　10月26日～27日
＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修（中国）
倉橋・立田　12月５日～10日
＊奈良文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修（奈良市）
平成17年度「陶磁器調査課程（中世陶磁器）」
佐藤（剛）　２月１日～９日
平成17年度「動物考古学課程」
土肥　３月７日～10日
＊奈良文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修（奈良市）
平成18年度「自然科学的年代決定法課程」
芝田　11月14日～17日
＊平成18年度第１回埋蔵文化財担当職員等講習会（名古屋市）
礒田　７月20日～22日
＊平成18年度アイヌ民俗文化財専門職員等研修会（札幌市）
田口・佐藤（剛）・鎌田・笠原・阿部　10月26日～27日

イ　内部研修

＊平成18年度現地調査報告会（センター研修室）　11月28日

5　平成18年度刊行予定報告書

第229集『恵庭市　柏木川４遺跡(2)』

柏木川基幹河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第230集『釧路町　東陽１遺跡』

一般国道44号釧路町釧路外環状道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第231集『江別市　対雁２遺跡(8)』

石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第232集『北斗市　矢不来７遺跡・矢不来８遺跡』

高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第233集『森町　三次郎川右岸遺跡』

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第234集『森町　森川３遺跡(2)』

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第235集『北斗市　矢不来６遺跡・矢不来11遺跡・館野４遺跡』

高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第236集『白滝遺跡群Ⅶ』

一般国道450号白滝丸瀬布道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第237集『北斗市　館野遺跡(1)』

高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第238集『千歳市　祝梅川上田遺跡・梅川２遺跡』

一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第239集『占冠村　占冠原野１遺跡』

北海道横断自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第240集『江別市　対雁２遺跡(9)』

石狩川改修工事の内対雁築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第241集『白老町　虎杖浜２遺跡(3)』

一般国道36号白老町虎杖浜改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第242集『赤井川村　板小屋沢遺跡・日の出２遺跡』

余市赤井川線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第243集『下川町　前サンル１遺跡』

天塩川サンルダム建設事業の内埋蔵文化財発掘調査報告書

第244集『北斗市　矢不来８遺跡(2)・矢不来10遺跡』

高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第245集『白糠町　上茶路遺跡』

一般国道392号白糠町上茶路道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

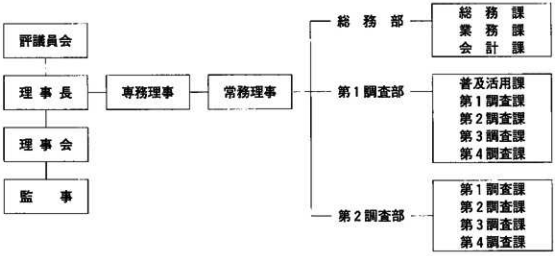
6　組織・機構

役　員（平成18年6月1日現在）

理事長	森　重　楯　一
専務理事	佐　藤　俊　和
常務理事	専務理事兼務
理　事	石　林　　清
理　事	海　津　順　吉
理　事	菊　池　俊　彦
理　事	北　川　芳　男
理　事	谷　本　一　之
理　事	田　端　　宏
理　事	西　田　　豊
理　事	宮　崎　　勝
監　事	佐　藤　一　夫
監　事	村　山　邦　彦

評議員（平成18年6月1日現在）

評議員	加　藤　邦　雄
評議員	木　村　方　一
評議員	白　崎　三千年
評議員	白　野　　覚
評議員	昌　子　守　彦
評議員	鵜　丸　俊　明
評議員	戸　塚　　隆
評議員	本　庄　裕　子
評議員	松　田　光　睦
評議員	山　田　　健



7　職　　員（平成18年4月1日現在）

総務部

総務部長	松本昭一
総務課長	松本　繁
主査	葛西宏昭
主任	中村貴志
参与	北浦　満
参与	加藤英樹
業務課長	菅野　聡
主査	礒田千秋
主任	小杉　充
主任	小笠原　学
参与	中村輝夫
参与	菊地隆雄
会計課長	吉田貴和子
主任	今本宏信

第1調査部

第1調査部長	○千葉英一
普及活用課長	村田　大
主査	藤本昌子
主任	藤井　浩
主任	倉橋直孝
第1調査課長	田口　尚
主査	花岡正光
主査	立川トマス
第2調査課長	佐藤和雄
主査	谷島由貴
主査	土肥研晶
主任	佐藤　剛
主任	吉田裕史洋
第3調査課長	三浦正人
主査	菊池慈人
主任	愛場和人
主任	袖岡淳子
主任	末光正卓
主任	広田良成
第4調査課長	鈴木　信
主査	皆川洋一
主査	鎌田　望
主任	新家水奈
主任	○宗像公司
主任	柳瀬由佳
嘱託	山田和史

第2調査部

第2調査部長	西田　茂
第1調査課長	遠藤香澄
主査	笠原　興
主任	芝田直人
主任	阿部明義
主任	酒井秀治
第2調査課長	佐川俊一
主任	中山昭大
主任	冨永勝也
主任	山中文雄
第3調査課長	熊谷仁志
主任	鈴木宏行
主任	坂本尚史
主任	大泰司　統
主任	直江康雄
第4調査課長	○工藤研治
主査	越田雅司
主任	影浦　覚
主任	立田　理
主任	福井淳一

○：北海道教育庁の派遣職員

調 査 年 報 19

平成18年度

平成19年２月８日発行

編集・発行　財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685-1
TEL 011-386-3231・FAX 011-386-3238
URL http://www.domaibun.or.jp/
E-mail mail@domaibun.or.jp

印　　刷　社会福祉法人 北海道リハビリー
〒061-1195 北広島市西の里507番地1
TEL 011-375-2116代・FAX 011-375-2115